

山 王 若 宮 V 遺 跡

山王小学校プール改築建築工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 1 8. 3

前橋市教育委員会

山 王 若 宮 V 遺 跡

山王小学校プール改築建築工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 1 8. 3

前橋市教育委員会



調査区遠景（広瀬川低地帯、赤城山を望む 南から）



調査区全景（上が北）



M-2号墳 周囲Hr-FA洪水層堆積状況（南から）



M-2号墳 舂石検出状況（東から）

はじめに

関東平野の北西部に群馬県は位置し、前橋市はその中央、上毛三山のひとつ名峰赤城を背にし、利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。豊かな自然環境にも恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、縄文時代の遺跡も、市内の随所に存在します。

古代において前橋台地は、広大な穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、律令時代になってからは總社・元總社地区に山王庵寺、国分僧寺、国分尼寺、國府など上野国の中核をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた肥橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地であったことから、横浜に至る街道は「日本のシルクロード」とも呼ばれ、横浜港からは前橋シルクの名で海外に輸出され、近代日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する山王若宮V遺跡は、県内でも有数の広瀬・朝倉古墳群に属する本市南部の山王町にあり、山王小学校プール改築工事に伴い発掘調査をおこないました。調査の結果、古墳4基、古墳時代の住居跡、縄文時代の住居跡などが見つかりました。現状での保存が困難なため、記録保存という形になりましたが、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められることに厚くお礼申しあげます。

平成30年3月

前橋市教育委員会

教育長 塩崎政江

例　　言

- 1 本書は山王小学校プール改築建築工事に伴う「山王若宮V遺跡」（前橋市遺跡コード：29 G 72）の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の発掘調査および整理作業は、前橋市長 山本 龍（教育施設課）からの委託を受けた技研コンサル株式会社が、前橋市教育委員会事務局文化財保護課の監理指導のもと実施した。
- 3 発掘調査および整理作業の体制は下記のとおりである。

遺跡名	山王若宮V遺跡
遺跡所在地	群馬県前橋市山王町 172 番地、176 番地 1、176 番地 6
監理指導	小峰 鑑（前橋市教育委員会）
調査担当	前田和昭（技研コンサル株式会社）
調査員	山田誠司 土屋一未（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	平成 29 年 11 月 9 日～12 月 25 日
整理作業期間	平成 29 年 12 月 26 日～30 年 3 月 23 日
調査面積	1,147 m ²
発掘調査参加者	新井 實 棚原義久 速藤好則 太田英明 加藤知恵子 神坂慶三 鶴田榮作 今野妙子 関口孝行 田代光男 田代京子 田部井美砂子 土屋和美 南雲富子 細野竹美 真下秀雄 丸山文江 村田稔男 矢島正志 吉浦英和
整理作業参加者	安藤三枝子 田所順子 南雲富子 福島様子 細野竹美
4 本書の編集は土屋が行い、執筆は I を小峰が、他を土屋が行なった。	
5 発掘調査で出土した遺物および図面等の資料は、一括して前橋市教育委員会で保管されている。	
6 発掘調査および本書の作成において、下記の諸氏、並びに機関から有益な御指導、御協力を賜りました。記して謝意を表します。（敬称略）	

山口逸弘 株式会社シノハラゼネラル 橋詰工業株式会社 前橋市立山王小学校 山下工業株式会社

凡　　例

- 1 本遺跡におけるグリッドの座標値は国家座標（座標第Ⅸ系：日本測地系）を使用した。方位北は座標北を示す。
- 2 挿図に国土地理院発行 1/200,000『宇都宮』『長野』、1/25,000『前橋』、前橋市発行 1/2,500 都市計画図を使用した。
- 3 土層および遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修）に掲げる。
- 4 遺構表示の記号は、堅穴住居跡：H、古墳：M、溝：W、土坑：D、ピット：Pとした。
- 5 遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。
遺構 堅穴住居跡・堅穴状遺構・井戸・土坑・ピット・その他・・・1/60 全体図・・・1/400
遺物 土器・石製品・・・1/3、1/4 鉄製品・・・1/2 古銭・・・1/1
- 6 本文および表中の計測値については（ ）は残存値を、〔 〕は復元値を表す。
- 7 遺物写真図版は、1 / 3 に近づけるように撮影を行い、それ以外のものについては右下に（ ）で示した。
- 8 遺構図のトーン表現は以下の通りである。

掘削面下  燃土層  降下火山灰混入洪水層 

9 主な火山灰降下物等の略称と年代は次の通りである。

As-B (浅間 B 軽石 : 1108 年) 、Hr-FA (榛名ニッ岳洪川テフラ : 5 世紀末～6 世紀初頭) 、As-C (浅間 C 軽石 : 3 世紀後葉～4 世紀初頭)

目 次

巻頭図版 1

巻頭図版 2

はじめに

例言・凡例

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の位置と環境	2
III	調査の方法と経過	8
IV	基本層序	9
V	検出された遺構と遺物	
	(1) 穴穴住居跡	11
	(2) 墓	12
	(3) 溝	13
	(4) 土坑	15
VI	発掘調査の成果と課題	
1	調査の成果	37
2	山王若宮地域の古墳群の変遷	37
3	山王若宮の集落と土器の変遷	39

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1	第13図 M-2号墳(2)	23
第2図	前橋の地形	3	第14図 M-3・4号墳	24
第3図	周辺の道路	4	第15図 W-1号溝	25
第4図	調査区位置図	8	第16図 W-2・3・4・5・7・11・14・15号溝	26
第5図	基本層序	9	第17図 W-6・8・9・10号溝	27
第6図	調査区全体図	10	第18図 W-12・13号溝	28
第7図	J-1号住居跡	17	第19図 土坑・ピット平面断面図	29
第8図	H-1・2号住居跡	18	第20図 J-1・H-1・2・3・4号住居跡出土遺物	30
第9図	H-3・4号住居跡(1)	19	第21図 H-4号住居跡、M-1号周溝羣、M-2号墳出土遺物	31
第10図	H-3・4号住居跡(2)	20	第22図 M-2・4号墳出土遺物	32
第11図	M-1号周溝羣	21	第23図 W-1号溝、D-4・7・8号土坑、遺構外出土遺物	33
第12図	M-2号墳(1)	22	第24図 山王若宮道路遺構全体図	38

表目次

第1表	周辺道路一覧	5
第2表	ピット計測表	17
第3表	出土遺物観察表	34

写真図版目次

- PL.1 遺跡の位置（上が北、2010年撮影）
PL.2 調査区遠景（中央奥に文殊山・阿弥陀山古墳 南東から） 調査区遠景（段崖下は広瀬川低地帯 西から）
PL.3 調査区全景（上が西）
PL.4 調査区全景（西から） 調査区全景（北東から） 調査区全景（北から） J-1全景（東から） J-1遺物出土状況（北から） J-1茂林出土状況（東から） 作業風景（北から）
PL.5 H-1・2全景（北から） H-1・2全景（南から） H-1・2A-A'（南から） H-1・2B-B'（西から） H-1炉全景（西から） H-1野蔵穴E-E'（東から） H-2炉C-C'（西から） 作業風景（北西から）
PL.6 H-3・4全景（北から） H-3・4全景（東から） H-3・4断面（東から） H-3・4断面（南西から） H-3・4遺物出土状況（北東から） H-3遺物出土状況（東から） H-4F-F'（東から） 説明会風景（北西から）
PL.7 作業風景（東から） 作業風景（南から） 作業風景（南から） 作業風景（東から） M-1全景（上が西）
PL.8 M-1全景（北から） M-1遺物出土状況（南東から） M-1遺物出土状況（北から） M-1遺物出土状況（東から） M-1南壁（北から）
PL.9 M-1A-A' 西側（南から） M-1A-A' 東側（南から） M-1南壁（北から） M-2全景（上が西）
PL.10 M-2全景（東から） M-2全景（東から） M-2葺石検出状況（東から） M-2周壁北側全景（南東から） M-2周壁北側FA洪水面検出状況（東から）
PL.11 M-2周壁北側FA洪水面検出状況（南東から） M-2C-C'（南から） M-2D-D'（南から） M-2E-E'（西から） M-2B-B'（南から） M-2小型出土状況（北西から） M-2A-A'（西から） M-2G-G' 南壁（東から）
PL.12 M-3全景（上が南） M-3全景（東から） M-3A-A'（西から） M-4全景（上が南） M-4全景（北から） M-4全景（北東から） M-4南壁（北から） M-4東壁隔壁部（西から）
PL.13 W-1全景（南から） W-1全景（北から） W-1A-A'（南から） W-1C-C'（北から） W-1埴輪出土状況（北から） W-2・3全景（南から）
PL.14 W-2・3A-A'（北から） W-4A-A'（南から） W-5全景（北西から） W-5A-A'（西から） W-6全景（南から） W-6・8・10全景（東から） W-6・8南壁（北から） W-6・8、D-2A-A'（南から）
PL.15 W-6B-B'（南から） W-7全景（南から） W-7A-A'（北から） W-9全景（西から） W-9A-A'（西から） W-10全景（東から） W-11全景（北から） W-11全景（南から）
PL.16 W-11A-A'（南から） W-12全景（南から） W-12B-B'（南から） W-12C-C'（南から） M-4、W-12A-A'（東から） W-13全景（北から） W-14全景（北から） W-15全景（南から）
PL.17 D-1A-A'（南から） D-2全景（南から） D-3全景（西から） D-3A-A'（南から） D-4全景（北西から） D-5全景（北から） D-5A-A'（西から） D-6全景（西から）
PL.18 D-6A-A'（南から） D-7全景（北から） D-8全景（北西から） D-9全景（西から） P-1全景（東から） P-3全景（南から） P-4全景（西から） 基本土層（西から）

I 調査に至る経緯

平成 29 年度公共事業照会で、山王小学校プール改築建築事業を確認した。建築工事箇所は、周知の埋蔵文化財包蔵地、特に「朝倉・広瀬古墳群」の範囲の属していることから、既存プール解体後に埋蔵文化財試掘確認調査を実施することで、前橋市長 山本 龍（教育施設課）（以下「前橋市」という。）と協議を行なった。

平成 29 年 7 月 27 日に前橋市より試掘確認調査依頼が提出された。試掘確認調査の結果、古墳時代の住居跡、古墳周囲などが検出された。工事計画と遺構検出深度を考慮すると、遺構の現状保存は困難であると判断し、記録保存を目的とした発掘調査実施に向けて協議を進めた。

同年 10 月 11 日付けで前橋市より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が、前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。市教委では既に区画整理事業に伴う発掘調査を実施中であり、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務委託することで依頼者である前橋市と合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することになった。同年 11 月 1 日付けで前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「山王若宮 V 遺跡」（遺跡コード：29 G 72）の「山王」は町名、「若宮」は旧小字名を採用した。ローマ数字は、過年度に実施した発掘調査と区別するために付したものである。



第 1 図 遺跡位置図

II 遺跡の位置と環境

地理的環境

山王若宮V遺跡は、前橋市街地より南東へ約6km、前橋市立山王小学校のプール用地に位置する。前橋市は地質・地形から北東部の赤城火山斜面、南西部の前橋台地、東部の広瀬川低地帯、南部の利根川氾濫原の四つの地域に分けられる。本遺跡は前橋台地の東端部に位置している。本遺跡から約30m 東は崖となり、崖下には旧利根川の河川敷になる広瀬川低地帯が広がっていることから、南東方向にわずかに低くなる地形となっている。

前橋台地は、約24,000 年前の更新世後期、浅間山を構成する黒斑山の大規模噴火に伴う山体崩落により、浅間山北部の応桑泥流堆積物および中之条泥流堆積物が形成された。吾妻川を流れ出たこの火山泥流堆積物とそれを被覆する水成堆積層を基盤として生成された台地である。現在の前橋台地は前橋泥流層の上にさらに浅間山や榛名山噴出のテフラで被覆され洪水層や黒っぽく土が堆積している。この台地上のはば中央を流下する利根川といいくつかの中河川によって各所に小規模な氾濫原を形成している。そして台地の東部には赤城山の南斜面との間に幅約3 km長さ約14 kmの細長い沖積地である広瀬川低地帯がある。この広瀬川低地帯は利根川の旧流路と考えられており、天文年間（16世紀）の洪水によって現在の川筋に移動したと想定されているが、人為的に流路が変えられた可能性もあるとも考えられている。

遺跡周辺はかつて佐波郡上陽村であったが、昭和35年に前橋市と合併された。現在は宅地造成や幹線道路の整備などの開発により、かつての農村地帯は本遺跡の西に広がる水田地帯を残す程度となっている。このような開発や戦後の開墾により、この地域にあった数多くの古墳が未調査のまま失われることとなった。

歴史的環境

本遺跡は群馬県内でも有数の古墳分布地帯である「朝倉・広瀬古墳群」に位置する。朝倉町、広瀬町、山王町を中心とする三つの地域で構成される古墳群である。昭和10年に行なわれた古墳調査をもとに、昭和13年『上毛古墳総覧』が刊行された。それによると、「朝倉・広瀬古墳群」では154基の古墳が確認されている。後世の削平などで昭和10年当時すでに消失している古墳もあることから更に多くの数の古墳が築造されていたと考えられる。本遺跡が属する山王地域には34基の古墳が存在していたとされるが、現在では山王金冠塚古墳（b）・文殊山古墳（g）・阿弥陀山古墳（h）がわずかに原形をとどめているのみである。以下、「朝倉・広瀬古墳群」における古墳の変遷を概観していく。

前期 4世紀代に二段の基壇を持つ朝倉2号墳（G）、古墳時代前期としては東日本最大規模の前方後方墳である八幡山古墳（L）、東日本最古の前方後円墳である前橋天神山古墳（M）が、4世紀中葉には文殊山古墳が築造される。前橋天神山古墳からは三角縁神獸鏡をはじめとする銅鏡や鉄製武器類などの豊富な副葬品が出土して



第2図 前橋の地形

いる。八幡山古墳の内容は明確ではないが前橋天神山古墳となんらかの相関関係があったのではないかと考えられる。またその規模や形状からみて被葬者が有力者であることは推定でき、当時この地域を支配圏にもつ有力な首長が存在していたことうかがわせるものである。

中期 5世紀代の古墳は数が少なく明確なものがない。県内でも貴重な帆立貝形の亀塚山古墳（X）は、6世紀初頭に降下したHr-FA以前に築造された5世紀末～6世紀初頭の数少ない古墳である。ほかに同時期と推定される前方後円墳である上陽村17号墳（c）がある。

後期 6世紀に入ると再び古墳の造営が活発になり、その数が増加していく。不二山古墳、天川二子山古墳（A）、上画家二子山古墳（T）、長山古墳（H）、大屋敷古墳（Q）のような中規模な前方後円墳が築造された。なかでも不二山古墳と山王金冠塚古墳は金銅製冠が出土している前方後円墳である。ほかにも上陽村24号墳（Y）や円墳である小旦那古墳（D）などがある。7世紀の古墳時代終末期にかけては円墳の小型化が進み、朝倉天神山古墳（B）、朝倉1号墳（I）、孤塚古墳（i）上陽村10号墳（j）のような小円墳が数多く点在するようになり古墳群を形成していくこととなる。その一方で、中型の円墳である山王大塚古墳（a）や方墳である大塚北古墳（Z）のような古墳も造られている。

次に、周辺地域の歴史的環境の概要を述べる。

弥生時代以前 本遺跡の位置する前橋台地において、旧石器時代の遺跡は現在までは発見されていない。台地の形成時期が、更新世後期によるものであることが要因だと考えられている。縄文時代の遺跡は前橋台地東部では非常に少なく、遺構が確認されている遺跡もごくわずかである。西善尺司遺跡（38）で前～中期の石器製作址が検出され、徳丸仲田遺跡（37）では草創期の隆起線文土器片や有舌尖頭器等の石器類がまとまって出土している。弥生時代の遺跡も比較的の遺跡がある前橋台地西部と比べるとやはり東部は非常に少ない。のことから弥生時代以前の前橋台地東部は居住活動が活発ではないことがうかがえる。

古墳時代 古墳時代に入ると周辺地域では遺跡数が飛躍的に増加していく。古墳が築造され、集落遺跡や生産遺跡が多く発見されるようになる。古墳時代前期には、集落が前橋台地の東端部の地域で営まれ始める。後閉鎖地遺跡（8）、後閉II遺跡（11）、西善尺司遺跡（38）公田池尻遺跡、公田東遺跡、櫛鳥川端遺跡、などで前期の住居跡が確認されている。いずれも住居跡から石田川式の土器が出土している。また、方形周溝墓も西善尺司遺跡で確認されている。南部拠点遺跡群（42）や横手湯田遺跡（22）では、周溝墓のような形状だが、住居的な要素を持つと考えられる周溝状遺構も検出されている。生産遺跡では、3世紀末に降下したと考えられるAs-C軽石で埋没した水田跡は利根川右岸の高崎市を流れる井野川流域でみられるが、本遺跡周辺では今のところ確認されていない。一方、As-C軽石を耕作土に含む水田跡は村中遺跡（26）、西田遺跡（25）、徳丸仲田遺跡等で検出されている。徳丸仲田遺跡では4世紀後半の灌漑用に用いられたと考えられる大溝も検出された。水田耕作が広い範囲で行なわれるようになり、微高地には集落、低地部は水田地帯の構図が出来始め、居住活動が活発になっていく。

古墳時代後期には、前期から継続的に営まれている水田耕作と耕地の開発などで可耕地を大幅に拡大させた。6世紀初頭に降下したHr-FAや6世紀中葉に降下したと考えられるHr-FPで埋没した水田跡、これらを含む洪水によって埋没した水田跡が朝倉工業団地遺跡群（16）、中内村前遺跡（39）、下阿内堀前畠遺跡（43）、南部拠点遺跡群、横手湯田遺跡、西田遺跡など各地で確認されている。継続的に営まれている集落もあるが、耕地開発により集落の移動があるのか、小規模集落遺跡の点在が見受けられるようになる。

奈良・平安時代 西善鏡治屋敷遺跡（10）、鶴光路櫻橋遺跡（35）などで平安時代の集落が確認でき、古墳時代後期に集落遺跡が減少した台地東部でも集落が再び営まれるようになった。また、朝倉伊勢西遺跡（2）、広瀬木ノ宮遺跡（8）などは古墳時代から継続的にある集落である。居住環境が良好な場所には大規模集落も作られ、西善尺司遺跡、中内村前遺跡、前田遺跡（40）では合わせて300軒近い住居跡が検出されている。8世紀に



第3回 周辺の遺跡

は律令制が導入され、前橋市元総社町付近には国府、国分寺、国分尼寺が造営された。前橋台地上で微高地に集落、低地を耕作地帯にする「都市計画」的な開発が行われ始める。条里地割が施行され大規模な耕地開発が行われた。条里地割を伴う水田は、弘仁9年（818）の地震による泥流で埋没した水田跡が確認できる。広瀬川低地帯にある中原遺跡ではこの泥流堆積物で埋没した条里地割を伴う水田跡が検出された。弘仁地震の後に、天仁元年（1108）浅間山の噴火が発生し、群馬県内に大量の軽石（As-B軽石）を降らせ田畠を埋没させた。このAs-B軽石層に覆われた水田では、条里地割を踏襲したと考えられる水田が多く見つかっている。本遺跡周辺においても広範囲で検出しており、この時期には耕地が爆發的に増大したことがわかっている。

中・近世 特色として環濠屋敷が上げられる。前橋市域だけでも数十箇所に上り、前橋台地東部の微高地に集中している。環濠屋敷には、遺構の周囲に堀を巡らせた環濠遺構、環濠遺構が集まって形成される環濠遺構群、環濠集落に大別される。環濠集落の形態には、環濠遺構群を囲んで惣堀をめぐらせものと網状に掘られた堀の間に居住空間が配されたものとがある。成立時期は不明瞭ではあるが、おそらく鎌倉時代末～室町時代初頭には成立していたのではないかと考えられている。本遺跡の周囲でも、藤川環濠集落（ニ）、後閑環濠集落（ケ）、飯塚環濠遺構（ナ）などの多数の環濠屋敷がある。飯塚環濠遺構は天正年間に宇津木氏が在城していたとされる。一方、近年の発掘調査によって未周知の環濠屋敷遺構が確認されている。徳丸高堰遺跡（36）、横手湯田遺跡、西田遺跡、徳丸仲田遺跡、西善寺司遺跡、鶴光路復橋遺跡で環濠屋敷の一部と考えられる溝跡、掘立柱建物跡、井戸等が検出されている。城館は室町時代の阿内古城（ウ）、力丸城（エ）、下長磯城（ア）、室町・戦国時代の宿阿内城（イ）がある。阿内城は那波氏の属城、力丸城は那波郡を支配した那波氏一族の居城と考えられている。近世 天明3年（1783）の浅間山噴火によって県内全域に降下した火山灰（As-A）や、この際に噴出した火山噴出物を含む泥流が吾妻川を経て利根川を下り、下流域に大きな被害をもたらした。降り積もった火山灰を地中に埋め戻して処理した「灰搔き穴」と呼称される復旧土坑、泥流で埋没した水田・畠跡が下阿内堀町畠道跡（59）、下阿内前田遺跡（60）などで検出されている。

中世と同じく、微高地に環濠屋敷が多く認められ、横手湯田遺跡、村中遺跡でも確認されている。近世以降の環濠屋敷は家屋と田畠をめぐらした一軒単位の規模であり、外敵防護だけではなく、富裕や伝統を示す象徴としての側面をもっていると考えられている。

第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	遺跡の概要	報告書・参考文献
1	山王若宮V道跡	縄文時代：住居跡、土坑。古墳時代：住居跡、方形周溝墓、帆立貝形古墳、円墳。中世後～漢。	本稿書書
2	山王若宮I～IV道跡	古墳時代：古墳、前期・後期住居跡、溝・土坑・井戸。	1998『山王若宮遺跡』、2000『山王若宮II道跡』、2001『山王若宮III道跡』、2010『年報 第41集』 群馬県教育委員会
3	伊勢道跡	平安時代：住居跡、井戸、土坑。	1991『伊勢道跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査班
4	野中・天神道跡	古墳時代：後期住居跡、墓。平安時代：住居跡、As-B下水田、島、埴跡。中世：掘立柱建物、井戸、墓。	1996『野中・天神道跡』財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
5	策道跡	古墳時代：後期住居跡。	1990『策道跡』前橋市教育委員会
6	鏡字廻り道跡	平安時代：溝。中世：溝。	1983『鏡字廻り道跡』前橋市教育委員会
7	朝倉伊勢西道跡 No.1・2	奈良・平安時代：住居跡、掘立柱建物、溝、溝。土坑採掘坑。中世後：溝。	2011『朝倉伊勢西道跡 No.1』、2012『朝倉伊勢西道跡 No.2』、2017『朝倉伊勢西道跡 No.3』前橋市教育委員会
8	後園田堀道跡	古墳時代：前期住居跡、As-C下水田。石郭墓。溝。奈良・平安時代：住居跡、溝、土坑。	1983『後園田堀道跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査班
9	坊山道跡	古墳時代：溝。奈良・平安時代：住居跡。	1983『坊山道跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査班
10	後閑道跡	遺構なし。	1982『後閑道跡』前橋市教育委員会
11	後閑道跡Ⅱ	古墳時代：前期・後期住居跡。奈良・平安時代：住居跡、As-B下水田。中・近世：掘立柱建物、溝。	1983『後閑道跡Ⅱ』前橋市教育委員会
12	朝倉・後園水田道跡	平安時代：As-B下水田。中・近世：溝。	2015『朝倉・後園水田道跡』前橋市教育委員会
13	広瀬本ノ宮道跡	古墳時代：後期住居跡。奈良・平安時代：住居跡。土器集積遺構、掘立柱建物、溝。井戸。	2006『広瀬本ノ宮道跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査班
14	木ノ宮道跡	奈良・平安時代：土坑。集石遺構。	1986『木ノ宮道跡』前橋市教育委員会
15	西善治原道跡	平安時代：住居跡。掘立柱建物跡、溝、土坑。	1995『西善治原道跡』西善治原道跡調査会

番号	遺跡名	遺跡の概要	報告書・参考文献
16	明治工業用地跡群 No.1～7	古墳時代：後期住居跡。Hr-FA 下・FP 下水田。平安時代：住居跡、As-B 下水田。中世：溝。近代：焼夷塀。	2011「明治工業用地跡群文化財発掘調査報告書」、2012「明治工業用地跡群」[考古・探査地図報告書 No. 3]、2012「明治工業用地跡群 No. 2」[「明治工業用地跡群」[考古・探査地図報告書 No. 4]]、「明治工業用地跡群 No. 5」、「明治工業用地跡群 No. 6」、2015「明治工業用地跡群 No. 7」前橋市教育委員会
17	下佐鳥遺跡	古墳時代：後期住居跡。	1983「須磨野遺跡・下佐鳥遺跡・宿内城跡」群馬県教育委員会
18	川曲遺跡	古墳時代：後期住居跡。	1962「川曲遺跡・東公園古墳」群馬県教育委員会
19	東田遺跡	古墳時代：前期の遺物出土。	1996「東田遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
20	高寺中田遺跡	平安時代：As-B 下水田。	1977「高寺中田遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
21	房丸桜町遺跡	古墳時代：中期住居跡、全良、平安時代：住居跡、溝。	2010「房丸桜町遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
22	横手湯田遺跡・横手湯田Ⅱ遺跡・横手湯田Ⅲ遺跡・横手湯田Ⅳ遺跡・横手湯田Ⅴ遺跡・横手湯田Ⅵ遺跡	古墳時代：堤状造溝、住居跡、堤溝墓。Hr-F A 下水田、Hr-FA 下水田。平安時代：As-B 下水田。中世：水草帯下水田。古墳時代：横手湯田Ⅱ遺跡、横手湯田Ⅲ遺跡、横手湯田Ⅳ遺跡、横手湯田Ⅴ遺跡、横手湯田Ⅵ遺跡。Aa-B 軽石復旧土坑群。	2002「横手湯田Ⅱ遺跡・横手湯田Ⅲ遺跡・横手湯田Ⅳ遺跡・横手湯田Ⅴ遺跡・横手湯田Ⅵ遺跡」財团法人群馬県埋蔵文化財発掘調査団 1996「横手湯田Ⅱ遺跡・横手湯田Ⅲ遺跡・横手湯田Ⅳ遺跡・横手湯田Ⅴ遺跡・横手湯田Ⅵ遺跡」財团法人群馬県埋蔵文化財発掘調査団 2001「横手湯田Ⅱ遺跡・横手湯田Ⅲ遺跡・横手湯田Ⅳ遺跡・横手湯田Ⅴ遺跡・横手湯田Ⅵ遺跡」財团法人群馬県埋蔵文化財発掘調査団
23	角里油免Ⅰ遺跡	平安時代：As-B 下水田。中世：溝。	2005「角里油免Ⅰ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
24	鶴光路神引遺跡	平安時代：As-B 下水田。	1997「鶴光路神引遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
25	西田遺跡	古墳時代：As-C 挿下水田。Hr-FA 下水田。平安時代：後期住居跡、As-B 下水田。江戸時代：土塁墓。	2002「西田遺跡・村中遺跡」財团法人群馬県埋蔵文化財発掘調査団
26	村中遺跡	古墳時代：As-C 濡土下水田。平安時代：As-B 下水田。中世：窑場跡、土壙墓。	
27	村中Ⅱ遺跡	平安時代：溝、土坑。	2001「村中Ⅱ遺跡・西田Ⅳ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
28	西田Ⅳ遺跡	平安時代：溝、土坑。	
29	西田Ⅲ遺跡	古墳時代：草原有矢頭古墳。古墳時代：溝、土坑。平安時代：As-B 下水田。櫛立柱建物。中世：近世：溝。	1999「西田Ⅲ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
30	西田Ⅱ遺跡	平安時代：後期住居跡、As-B 下水田。	1998「横手湯田Ⅱ遺跡・西田Ⅱ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
31	西田Ⅴ遺跡	平安時代：As-B 下水田。中世：近世：溝。	2001「西田Ⅴ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
32	鶴光路樅倉Ⅱ遺跡	平安時代：住居跡。溝、中世：近世：土坑、溝。	2000「鶴光路樅倉Ⅱ遺跡・櫛丸高塚Ⅱ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
33	櫛丸高塚Ⅰ・Ⅱ遺跡	平安時代：住居跡。溝、中世：近世：溝。	
34	西田Ⅵ遺跡	平安時代：As-B 下水田。中世：近世：溝。	1999「西田Ⅵ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
35	鶴光路樅倉遺跡	平安時代：住居跡。櫛立柱建物。As-B 下水田。中世：窑場。	2002「鶴光路樅倉遺跡」財团法人群馬県埋蔵文化財発掘調査団
36	櫛丸高塚Ⅰ・Ⅱ遺跡	共生以降：溝、土坑。ピット、古墳時代：前期遺物。平安時代：As-B 下水田。中世：住居跡、土坑、溝。	1999「櫛丸高塚Ⅰ・Ⅱ遺跡・櫛丸田畠Ⅲ遺跡・西田汎司遺跡」下田常富・木曾登利・堀田洋子・河野千尋・西田汎司・櫛丸高塚Ⅱ遺跡・櫛丸田畠Ⅱ遺跡・西田汎司・櫛丸高塚Ⅲ遺跡・西田汎司・櫛丸田畠Ⅲ遺跡・西田汎司・櫛丸高塚Ⅳ遺跡・西田汎司・櫛丸田畠Ⅳ遺跡・西田汎司・櫛丸高塚Ⅴ遺跡・西田汎司・櫛丸田畠Ⅴ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
37	櫛丸田畠Ⅰ・Ⅱ遺跡	古墳時代：草原斯指御室起文堂上型。有壳无顶窓。古墳時代：前期住居跡、As-C 濡土下水田。Hr-FA 下水田。溝、平安時代：後期住居跡、櫛立柱建物。As-B 下水田。中世：窑場。	2000「櫛丸田畠Ⅰ・Ⅱ遺跡・櫛丸高塚Ⅱ遺跡・西田汎司遺跡」財团法人群馬県埋蔵文化財発掘調査団 1998「櫛丸田畠Ⅰ・Ⅱ遺跡・櫛丸高塚Ⅱ遺跡・西田汎司遺跡」財团法人群馬県埋蔵文化財発掘調査団 1999「櫛丸高塚Ⅰ・Ⅱ遺跡・櫛丸田畠Ⅲ遺跡・西田汎司遺跡・下田常富・木曾登利・堀田洋子・河野千尋・西田汎司・櫛丸高塚Ⅱ遺跡・櫛丸田畠Ⅱ遺跡・西田汎司・櫛丸高塚Ⅲ遺跡・西田汎司・櫛丸田畠Ⅲ遺跡・西田汎司・櫛丸高塚Ⅳ遺跡・西田汎司・櫛丸田畠Ⅳ遺跡・西田汎司・櫛丸高塚Ⅴ遺跡・西田汎司・櫛丸田畠Ⅴ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
38	西森尻川Ⅰ・Ⅱ遺跡	古墳時代：石器ブロック。古墳時代：周溝墓、Hr-FA 下水田。全良、平安時代：住居跡、As-B 下水田。中世：窑場、大葬墓。	2001「西森尻川Ⅰ・Ⅱ遺跡」財团法人群馬県埋蔵文化財発掘調査団。1998「櫛丸田畠Ⅰ・Ⅱ遺跡・西森尻川Ⅰ・Ⅱ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
39	内中村遺跡	古墳時代：後期住居跡、溝、土坑、田道、Hr-FA 下水田。全良、平安時代：住居跡、櫛立柱建物跡。島、As-B 下水田。中世：近世：堆積物散在、用水路、溝、水田。	2002「中内村前遺跡（1）」。2003「中内村前遺跡（2）」。2005「中内村前遺跡（3）」財团法人群馬県埋蔵文化財発掘調査団
40	前田遺跡	全良、平安時代：住居跡、窑場、土坑、溝、As-B 下水田。中世：近世：堆積物散在、井戸、土坑、溝、水田。	2004「前田遺跡」財团法人群馬県埋蔵文化財発掘調査団
41	前田Ⅰ・Ⅱ遺跡	平安時代：住居跡、As-B 下水田。溝。	1991「前田遺跡」、「前田遺跡Ⅱ」、「前田遺跡Ⅲ」。1999「前田遺跡Ⅳ」。2000「前田遺跡Ⅴ」。「前田遺跡Ⅵ」前橋市教育委員会
42	南部拠点遺跡群 No. 1～11	古墳時代：堤状造溝、井戸、溝、Hr-FA 下水田。平安時代：As-B 下水田。中世：近世：櫛立柱建物跡、溝、井戸、水田。近代：焼夷塀。	2000「南部拠点遺跡群 No. 1」[「南部拠点遺跡群 No. 2」]「南部拠点遺跡群 No. 3」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2010「南部拠点遺跡群 No. 4」[「南部拠点遺跡群 No. 5」]「南部拠点遺跡群 No. 6」2011「南部拠点遺跡群 No. 4」[「南部拠点遺跡群 No. 7」]「南部拠点遺跡群 No. 8」[「南部拠点遺跡群 No. 9」]「南部拠点遺跡群 No. 11」前橋市教育委員会
43	下阿内内田町遺跡	古墳時代：円形切妻造、土器・筒瓦・井戸、Hr-FA 下水田。平安時代：As-B 下水田。中世：近世：As-A 陶臼田。	2001「下阿内内田町遺跡」下阿内内田町遺跡」財团法人群馬県埋蔵文化財発掘調査団
44	下阿内前田遺跡	古墳時代：土坑。溝、As-C 濡土下水田。平安時代：As-B 下水田。中世：As-B 亂拂跡。	

	古墳名	所在地	残存	形態				時期			備考
				前方後方	前方後円	帆立貝形	円	方	前	中	
A	美川二子山古墳	前橋市文京町	○	●							全長 104 m 径 43 m
B	朝倉山神山古墳		×			●					径 71 m
C	上川田村 26 号墳		×			●					全長 85 m
D	小豆山古墳		×			●					全長 45 m
E	朝倉山古墳		×	●							全長 55 m
F	上川田村 18 号墳		×	●							徑 26 m
G	朝倉山 2 号墳		×			●					全長 85m
H	長山古墳		×	●							● 全長 85m 圓穴式石室。埴丘が破壊されており、時期、板磚不明。 全長 85 m
I	朝倉 1 号墳		×			●					全長 130 m 全長 129 m、粘土路のみ保存。
J	朝倉 3 号墳		×								径 24 m
K	鶴巣原古墳		○	●							全長 85 m
L	八幡山古墳		○	●							径 39 m
M	前橋大神山古墳		△	●							全長 89 m
N	上川田村 113 号墳		×			●					全長 50 m
O	上川田村 86 号墳		×	●							径 40 m
P	飯玉神社古墳		○			●					全長 80 m
Q	大屋敷古墳		×	●							径 30 m
R	上川田村 111 号墳		×			●					径 16 m
S	鶴巣山古墳		×			●					径 25 m
T	上兩東一子山古墳		×	●							全長 60 m
U	オトウガ山古墳		×			●					● 全長 25 m。鐵六式石室。
V	乞食山古墳		×			●					● 1 道 14 m
W	ボシケン山古墳		×			●					● 径 44 m、粘土路をもつた円墳を利用して椭円式石室を作る。
X	龜塚山古墳		×		●						● 全長 53 m、全鋼製金冠出土。
Y	上篠 24 号墳		×			●					記載漏れにて評価は不明。 全長 67 m
Z	大塚山古墳		×			●					径 50 m
a	山王丸塚古墳		×			●					径 25 m。
b	山王丸塚古墳		○	●							径 25 m。
c	上篠 17 号墳		×			●					径 25 m。
d	上篠村 13 号墳		×			●					径 10 m
e	神農寺東古墳		×			●					径 30 m
f	上篠村 12 号墳		△	●							径 35 m
g	文徳山古墳		○			●					
h	阿彌山古墳		○		●						
i	孤塚古墳		×			●					
j	上篠村 10 号墳		×			●					
k	上篠 25 号墳		△			●					
l	東高大塚古墳		×		●						

城・環濠群名称	所在地	時期	築・在城者	造構			備考
				堀	土居	戸口	
ア 下長城城	前橋市下長城町	16 C					
イ 篠阿内城	前橋市鬼里町	16 C	三輪右丹	○	○	○	堀台、根小屋 文献「松原私説」
ウ 利内古城	前橋市鬼里町	文明九年	土居顯定				文献「松原私説」
エ 力丸城	前橋市力丸町	15・16 C	力丸氏	○	○	○	根小屋 文献「永祿日記」「歴生文書」
オ 野中塙瀬遺構群	前橋市野中町						五輪塔、板磚出土。
カ 丸川内居	前橋市文京町						独立柱建物 独立文書館遺跡。
キ 朝倉塙瀬遺構群	前橋市朝倉町						
ク 後庭園城	前橋市広郷町						
ケ 後園瀬集落	前橋市後園町						
コ 山王塙瀬集落	前橋市山王町						
サ 下池塙瀬集落	前橋市下佐久町						
シ 西善瀬遺構群	前橋市西善町						
ス 前田殿城	前橋市鬼里町						
セ 鶴光跡鬼里塙瀬遺構群	前橋市鶴小路町、他						14ヶ所の塙瀬遺構。
ソ 東宮塙瀬遺構群	前橋市宮地町						
タ 田西沿塙瀬遺構群	前橋市西青町	16 C	筑田氏				
チ 房丸東塙瀬遺構群	前橋市房丸町						
フ 桃源院塙瀬遺構群	前橋市西青町						
ニ 桃源院塙瀬遺構群	前橋市西青町						6ヶ所の塙瀬遺構。
ト 東丸塙瀬遺構群	前橋市力丸町						
チ 斑塙瀬遺構群	玉村町利賀塙	天文2年開	宇津木氏				宇津木文書、田口文書、 11ヶ所の塙瀬遺構、想断も 検出。
ニ 梅川湖塙瀬集落	玉村町梅川						
ヌ 徳丸北塙瀬遺構群	前橋市徳丸町		新井氏、舟野氏現住	○			

III 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、前橋市教育委員会が行った試掘調査の結果に基づき、山王小学校プール改築に伴い現状保存が不可能な部分を当該箇所として調査を行った。また、グリッド座標は平成 12 年度（山王若宮 II 遺跡）のグリッドを基準に、国家座標（日本測地系、平面直角座標第 IX 系） $X = + 38,800,000 \text{ m}$ 、 $Y = - 63,350,000 \text{ m}$ を基点となる X 0・Y 0 グリッドとし、4 m ピッチで経線を X、緯線を Y として北西隅を基点に番号を付与した。X 30・Y 50 グリッドの公共座標については、国家座標（日本測地系、平面直角座標第 IX 系） $X = + 38,600,000 \text{ m}$ 、 $Y = - 63,230,000 \text{ m}$ である。

発掘調査は平成 29 年 11 月 9 日より 0.5 m バックホーを使用し、調査区東部から表土掘削を開始した。重機による掘削は現地表面から 7 ~ 80 cm 下の黒褐色土とロームの混土層までとした。以下は人力による鋤簾を用いた



第 4 図 調査区位置図

掘削とし、精査・遺構内の掘り下げには移植ゴテを用いた。その後、調査区北東端から鋤籠を用いた遺構確認を開始し、本調査に入った。遺構確認面からは土器片が多数出土したが、遺構プランが重複しており黒褐色土とロームの混土層のため、プラン確定まで何度か調査区全面に鋤籠をかけ適宜サブトレーナーを入れ遺構の有無を土層断面からも確認することとした。その結果、上面から掘り込まれた溝（W-2～8号溝）も含め、古墳・住居、溝、土坑、ピット、その他不明確な遺構が確認された。不明確な遺構についてはトレーナーを入れながら掘り下げ、古墳周囲、繩文住居であることが判明した。それにより当初葺き石の並びの形状などから円墳と考えられていたM-2号墳が帆立貝形古墳であることも判明した。12月13日、山王小学校全校生徒に向け遺跡説明会を行なった。12月21日、調査区の全景の空中写真撮影と測量を行い、25日、住居の掘り方とM-1・2号墳の墳丘断面確認調査をし、周溝墓1基・古墳3基・住居跡5軒・溝15条、土坑9基、ピット4基を検出した現地調査を終了した。

調査遺構の記録については、平面図はトータルステーション・電子平板を併用し、断面図は座標値を付与したオルソーフォトから図化している。写真記録は35mmフィルムカメラ（モノクロ・リバーサル）とデジタルカメラの3種類を使用し、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を1回行なった。



説明会風景と配布資料

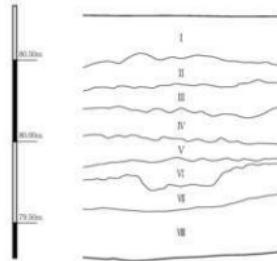
IV 基本層序

本遺跡は火山泥流堆積物とそれを覆う火山灰質シルト粘土で形成された洪積台地である前橋台地と旧利根川の河川敷である広瀬川低地帯の境となる崖上に位置する。調査区は西から東へと緩やかに傾斜した地形となっており、約30m東が崖となっている。

基本層序の観察は、調査区西壁はM-1号墳の墳丘上であり、南北壁ともに検出された遺構の影響を大きく受けているため、比較的影響が少ない東壁にて行なった。

I層は山王小学校のプールに伴う搅乱土である。II・III層のAs-B軽石混土層、IV～VI層のAs-C軽石混土層は調査区全面に堆積しており、VI層上面が今調査の遺構確認面である。VII・VIII層は変色したローム層であり、湧水が認められる。

山王若宮I～IV遺跡の基本層序との対応関係は、I遺跡II・III層がII・IV層、IV層がV層、VI層が本遺跡のVII層と対応する。II遺跡II層がII・III層、III層がV層、IV層がVI層、V層が本遺跡のVII層と対応する。III遺跡II・III層がII・III層、VI層がV層、VII層が本遺跡のVI層と対応する。IV遺跡の基本層序は本遺跡と類似している。



基本層序

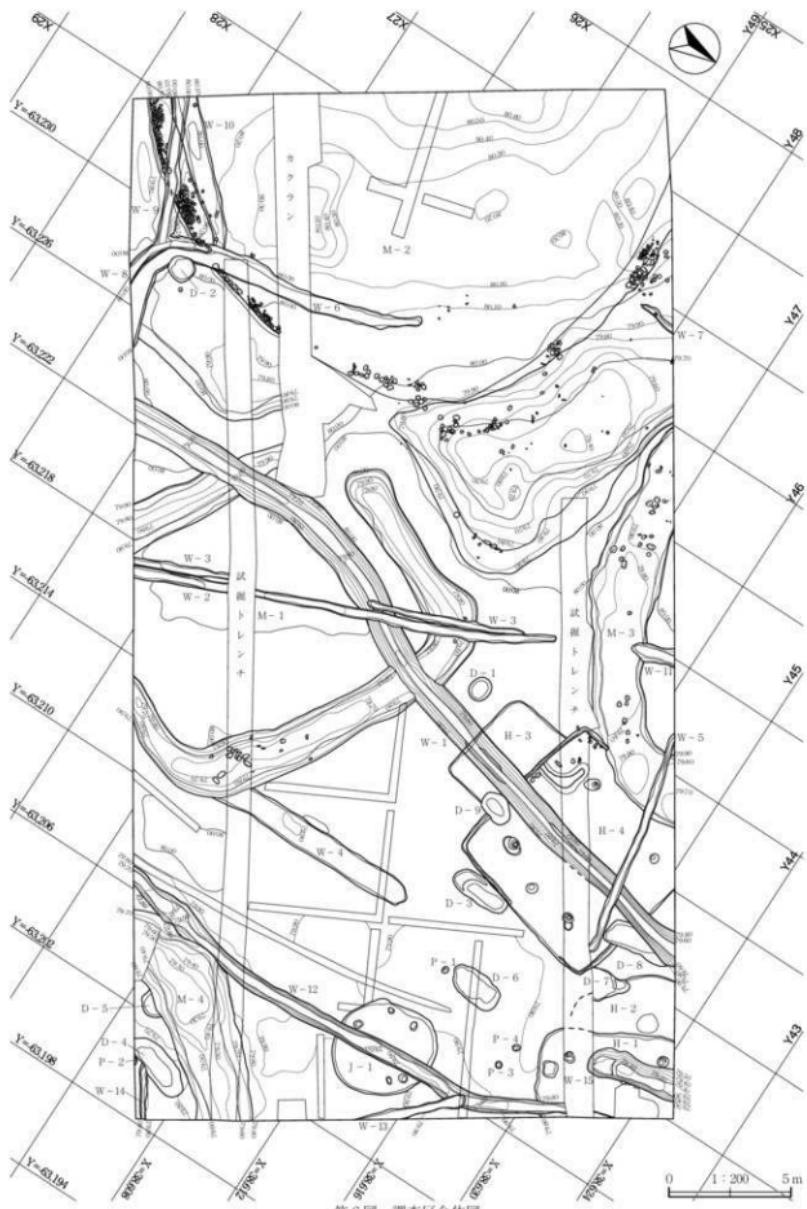
I 搪乱土 (25YS-4) 細まり微く、粘性有り、砂岩等の混入した粗粒土。火成岩碎片 (25YS-6-2) 細まり微く、粘性有り、As-B軽石を多量含む。
II 軽石混土 (25YS-2-2) 細まり微く、粘性有り、As-C軽石を少量含む。火成岩碎片有り。

IV 軽石混土 (25YS-4) 細まり有り、粘性有り、As-C軽石を多量含む。火成岩碎片有り。火成岩碎片有り。火成岩碎片有り。火成岩碎片有り。

V 軽石混土 (25YS-2) 細まり有り、粘性有り、ローム及 As-C軽石を少量含む。(遺跡確認面)

VI に古い黄褐色土 (25YS-4) 細まり中や有り、粘性有り、変色したワツ
VII に古い黄褐色土 (25YS-3) 細まり中や有り、粘性有り、少細を含む。変色したローム層。

第5図 基本層序



第6図 調査区全体図

V 検出された遺構と遺物

(1) 穴住居跡

J-1号住居跡 (第7図、PL. 4)

位置 X 35～37、Y 46・47 主軸方向 N-28.4°-E 規模 東西軸 3.85 m、南北軸 4.27 m、壁現高 0.27 m
面積 12.88 m² 床面 平坦な床面。住居中央から住居壁面に向かって弱い硬化が認められる。重複 W-12号溝と重複しており、新旧関係は本遺構→W-12の順となっている。炉 検出されず。貯蔵穴 検出されず。柱穴 5基検出している。P1は長軸 0.36 m、短軸 0.34 m、深さ 0.43 m、P2は長軸 0.33 m、短軸 0.19 m、深さ 0.36 m、P3は長軸 0.38 m、短軸 0.32 m、深さ 0.32 m、P4は長軸 0.36 m、短軸 0.27 m、深さ 0.53 m、P5は長軸 0.27 m、短軸 0.20 m、深さ 0.36 mをそれぞれ測る。出土遺物 勝坂2・3式(1～6)、阿玉台II式(7)等の鉢・深鉢が主体となる。浅鉢(8)は検出面からの出土であり、勝坂3式の範疇ではあるが、やや新相を示す。時期 出土遺物の傾向から縄文時代中期前半と想定される。

H-1号住居跡 (第8図、PL. 5)

位置 X 34・35、Y 43～45 主軸方向 (N-62.96°-E) 規模 東西軸 (3.48 m)、南北軸 (5.6 m)、壁現高 0.15 m。面積 (19.24 m²) 床面 全体にしっかりと硬化面がある貼床。重複 H-2号住居跡、W-12・15号溝と重複しており、新旧関係はW-15→H-2→本遺構→W-12の順となっている。炉 住居中央やや南西寄りに1基検出。規模(主軸方向×直交方向×深さ)は 0.55 m × 0.48 m × 0.02 m。梢円形プランを呈し、覆土中には焼土粒がやや多く確認されるが、火床面の被熱は弱い。貯蔵穴 南側から1基検出。長軸 0.65 m、短軸 0.58 m、深さ 0.22 mを測り、平面形は隅九方形を呈する。柱穴 2基検出されている。P1は長軸 0.45 m、短軸 0.45 m、深さ 0.26 m、P2は長軸 0.47 m、短軸 0.40 m、深さ 0.45 mをそれぞれ測る。掘り方 ローム粒を微量に含む黒褐色土で構築されている。出土遺物 床面直上よりS字状口縁台付甕(1)の台部、他には小破片のために掲載には至らなかったが、横位櫛描波状文が施文された樽式系の甕が出土している。時期 重複関係や出土遺物の傾向から4世紀前半以降と想定される。

H-2号住居跡 (第8図、PL. 5)

位置 X 33・34、Y 44・45グリッド 主軸方向 不明。 規模 東西 (2.46 m)、南北 (3.41 m)、壁現高 0.26 m。面積 (6.8 m²) 床面 凹凸があり比較的弱い硬化面がある貼床。重複 H-1号住居跡、D-7号土坑と重複しており、新旧関係はD-7→本遺構→H-1の順となっている。炉 住居中央やや南西寄りに1基検出。規模(主軸方向×直交方向×深さ)は 0.8 m × 0.84 m × 0.03 m。円形プランを呈し、覆土中には焼土層が確認されるが、火床面の被熱は弱い。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 ローム粒を少量含む褐色土で構築されている。出土遺物 覆土中より、頸部内面に横位のハケメをもつS字状口縁台付甕(1)、他に樽式系甕の小破片が出土している。時期 出土遺物の傾向から4世紀前半と想定される。

H-3号住居跡 (第9・10図、PL. 6)

位置 X 32～34、Y 46～48 主軸方向 (N-79.2°-W) 規模 東西軸 4.27 m、南北軸 (2.58 m)、壁現高 0.11 m。面積 (10.87 m²) 床面 全体にしっかりと硬化面がある貼床。重複 H-4号住居跡、W-1号溝、D-9号土坑と重複しており、新旧関係はD-9→本遺構→H-4→W-1の順となっている。カマド 検出されず。貯蔵穴 検出されず。柱穴 検出されず。掘り方 ローム粒を少量含む褐色土で構築されている。出土遺物 床面直上から土師器内斜口縁坏(1)、甕(2)が出土している。時期 出土遺物の傾向から5世

紀後半と想定される。

H-4号住居跡（第9・10図、PL. 6）

位置 X 32～34、Y 44～46 主軸方向 N-74°-W 規模 東西軸 7.33 m、南北軸 7.6 m、壁現高 0.2 m。面積 50.82 m² 床面 全体にしっかりと硬化面がある貼床。重複 H-3号住居跡、M-3号墳、W-1・5号溝、D-8・9号土坑と重複しており、新旧関係は D-8・9→H-3→本遺構→W-1→W-5 の順となっている。カマド 明確な形は検出されていないが、カマドの崩落土と考えられる焼土混じりの暗褐色土層とその下層では灰・焼土層の堆積が確認されている。貯蔵穴 検出されていないが、貯蔵穴の周堤帯と考えられる遺構が確認されている。柱穴 5基検出されている。P1は長軸 0.40 m、短軸 0.38 m、深さ 0.43 m、P2は長軸 0.48 m、短軸 0.38 m、深さ 0.47 m、P3は長軸 0.89 m、短軸 0.61 m、深さ 0.48 m、P4は長軸 0.68 m、短軸 0.47 m、深さ 0.47 m、P5は長軸 0.47 m、短軸 0.41 m、深さ 0.18 m をそれぞれ測る。P1～4が柱穴、P5が出入り口の梯子穴と想定される。掘り方 ローム粒を少量に含む黒褐色土で構築されている。出土遺物 床面直上から、土師器單口縁丸底坏（1・3）、内斜口縁坏（2・4～7）、瓶（8）、壺（9～11）、砥石（12）が出土している。時期 重複関係や出土遺物の傾向から5世紀末と想定される。

（2）墳墓

M-1号周溝墓（第11図、PL. 7～9）

位置 X 31～35、Y 48～50 主軸方向 N-119°-E 規模 長軸 14.08 m、短軸 12.59 m。形状等 北西方向に長い長方形。重複 M-2号墳、W-1～4号溝と重複しており、新旧関係は本遺構→M-2→W-1→W-2・3・4の順である。（W-2・3・4の新旧関係は不明） 墳丘 後世の削平を受け、墳丘は消失しており平坦になっている。周堀 上端 1.44～1.72 m、下端 1.27～1.56 m、深さ 0.3 m。主体部 トレンチ調査を実施したが、検出されず。出土遺物 周堀底面より S字状口縁台付壺（1）が出土している。時期 覆土や出土遺物の傾向から古墳時代前期中葉と想定される。

M-2号墳（第12・13図、PL. 9～11）

位置 X 26～31、Y 47～53 主軸方向 (N-102.1°-W) 規模 全長 (18.01 m)、幅 (23.64 m)。形状等 東西方向に向く帆立貝形古墳であり、周堀は造り出し部東端部を除いた馬蹄形となっている。重複 M-1号周溝墓、W-6～10号溝と重複しており、新旧関係は M-1→本遺構→W-10→W-9→W-6→W-8の順である。墳丘 後世の削平を受け、墳丘は消失しており平坦になっているが、周堀との際には一部葺石が残存している。大ぶりな梢円形の石を基底面に配し、上面は細長い石材の長手方向を墳丘に向けて置く小口積みとなっている。周堀 上端 4.0～7.7 m、下端 3.4～4.6 m、深さ 0.26～0.66 m。上端 4.0～7.7 m、下端 3.4～4.6 m、深さ 0.26～0.66 m を測る。覆土中層や上位には Hr-FA を含む洪水層が検出している。また、洪水層の上面からは、崩落した葺石が北西側を中心多く見受けられた。主体部 トレンチ調査を実施したが、現代の削平は墳丘の大半に及んでおり、検出されなかった。出土遺物 周堀覆土より土師器高坏（1～3）、土師器小型壺（4）、土師器坏（5～15）、土師器瓶（16）、土師器壺（17～25）が出土している。時期 Hr-FA 洪水層の堆積と出土遺物の傾向から5世紀末と想定される。備考 周辺の帆立貝形古墳としては、龜塚山古墳（上陽村20号古墳）、阿弥陀山古墳（上陽村7号古墳）、山王若宮IV遺跡M-1号墳（上陽村11号古墳）がある。

M-3号墳（第14図、PL.12）

位置 X 28～32、Y 45～47 主軸方向 不明。 規模 長径（9.14 m）、短径（1.37 m）。 形状等 調査区内で確認できたのは古墳の一部のみで大半が調査区外となっている。そのため検出されている周堀の形状より推定し、約 15～17 m の円墳であると推定される。 重複 H-4号住居跡、W-5・11号溝と重複しており、新旧関係は H-4 → 本造構 → W-11 → W-5 の順である。 墳丘 後世の削平を受け、墳丘は消失しており平坦になっている。 周堀 上端 2.3～3.0 m、下端 1.6～2.6 m、深さ 0.2 m。 主体部 検出されず。 出土遺物 繩文時代中期前半や樽式系の混入遺物や、小破片の埴輪片が出土している。 時期 重複関係から判断すると、6世紀以降と考えられる。

M-4号墳（第14図、PL.12・16）

位置 X 36～37、Y 47～49 主軸方向 不明。 規模 長径（5.9 m）、短径（2.46 m）。 形状等 調査区内で確認できたのは古墳の一部のみで大半が調査区外となっている。そのため検出されている周堀の形状より推定し、約 15～17 m の円墳であると推定される。 重複 W-12・14号溝、D-4・5号土坑、P-2号ピットと重複しており、新旧関係は D-4 → 本造構 → D-5 → P-2 → W-12 → W-14号溝の順である。 墳丘 後世の削平を受け、墳丘は消失しており平坦になっている。 周堀 上端 2.2～2.7 m、下端 1.2～1.7 m、深さ 0.28 m。 主体部 検出されず。 出土遺物 器台（1）、高坏（2）、埴（3）、二重口縁壺（4・5）、頭部内面に横位ハケメが僅かに残存する S字状口縁台付壺（6）が出土している。 時期 重複関係や出土遺物の傾向から 4世紀中葉と想定される。

（3）溝

W-1号溝（第15図、PL.13）

位置 X 31～33、Y 44～52 主軸方向 N-10.43°-E 規模 検出長（31.65 m）、上端 0.9～1.5 m、下端 0.2～0.5 m、深さ 0.42 m。 形状等 南北方向に向かって、断面形状はV字形を呈する。 重複 H-3・4号住居跡、M-1号周溝墓、W-2・3・5号溝、D-8号土坑と重複し、新旧関係は D-8 → M-1 → H-3 → H-4 → 本造構 → W-2・3・5の順である。 出土遺物 円筒埴輪片（1）が出土しているが、周辺古墳からの混入遺物と考えられる。 時期 本造構に帰属する出土遺物が無いため、重複関係から判断すると 6世紀後半以降、中世以前と考えられる。 備考 底面に砂礫の堆積が認められることから、通水していた可能性がある。

W-2号溝（第16図、PL.13・14）

位置 X 31～33、Y 47～51 主軸方向 N-22.7°-W 規模 検出長（17.48 m）、上端 0.3～0.5 m、下端 0.13～0.3 m、深さ 0.07 m。 形状等 南北方向に向かって、断面形状は弧状を呈している。 重複 M-1号周溝墓、W-3号溝と重複し、新旧関係は M-1 → 本造構 → W-3 の順である。 W-3とは重複関係はあるがほぼ同時期と推定される。 出土遺物 なし。 時期 覆土の傾向から中世以降と想定される。

W-3号溝（第16図、PL.13・14）

位置 X 31～33、Y 47～51 主軸方向 N-22.7°-W 規模 検出長（10.3 m）、上端 0.22～0.35 m、下端 0.14～0.26 m、深さ 0.07 m。 形状等 南北方向に向かって、断面形状は弧状を呈している。 重複 M-1号周溝墓、W-2号溝と重複し、新旧関係は M-1 → 本造構 → W-2 の順である。 W-2とは重複関係はあるがほぼ同時期と推定される。 出土遺物 土器器壺、坏の小片が出土している、周辺造構からの混入遺物と考えられる。 時期 本造構に帰属する遺物がないため、重複関係と覆土の傾向から中世以降と想定される。

W-4号溝 (第 16 図、PL.14)

位置 X 34、Y 47 ~ 50 主軸方向 N - 0° 規模 検出長 (13.23 m)、上端 0.9 ~ 1.2 m、下端 0.84 ~ 0.96 m、深さ 0.08 m。 形状等 南北方向に走向し、断面形状は不整形を呈している。 重複 M - 1 号周溝墓と重複し、新旧関係は M - 1 → 本遺構の順である。 出土遺物 なし。 時期 覆土に As-B の混入がないことから As-B 降下以前と考えられる。

W-5号溝 (第 16 図、PL.14)

位置 X 31 ~ 33、Y 45 主軸方向 N - 77.64° - E 規模 検出長 (9.48 m)、上端 0.2 ~ 0.36 m、下端 0.12 ~ 0.23 m、深さ 0.11 m。 形状等 東西方向に走向し、断面形状は箱形状を呈している。 重複 H - 4 号住居跡、M - 3 号墳、W - 1 号溝と重複し、新旧関係は H - 4 → M - 3 → W - 1 → 本遺構の順である。 出土遺物 土師器高壺が出土しているが、周辺古墳からの混入遺物と考えられる。 時期 本遺構に帰属する遺物がないため、重複関係と覆土の傾向から中世以降と想定される。

W-6号溝 (第 17 図、PL.14・15)

位置 X 29 ~ 31、Y 50 ~ 53 主軸方向 N - 12.36° - W 規模 検出長 (13.64 m)、上端 0.67 ~ 0.85 m、下端 0.5 ~ 0.65 m、深さ 0.2 m。 形状等 南北方向へ走向しているが、調査区南壁際にて東西方向に向きを変える。断面形状は台形状を呈する。 重複 M - 2 号墳、W - 8 ~ 10 号溝、D - 2 号土坑と重複し、新旧関係は M - 2 → D - 2 → W - 10 → 本遺構 → W - 9 → W - 8 の順である。 出土遺物 土師器甕底部が出土している、周辺古墳からの混入遺物と考えられる。 時期 本遺構に帰属する遺物がないため、重複関係と覆土の傾向から中世以降と想定される。

W-7号溝 (第 16 図、PL.15)

位置 X 28、Y 48 主軸方向 N - 65° - E 規模 検出長 (1.63 m)、上端 0.2 ~ 0.3 m、下端 0.15 ~ 0.17 m、深さ 0.27 m。 形状等 南北方向に走向し、断面形状は箱形状を呈している。 重複 M - 2 号墳と重複し、新旧関係は M - 2 → 本遺構の順である。 出土遺物 なし。 時期 覆土の傾向から中世以降と想定される。

W-8号溝 (第 17 図、PL.14)

位置 X 30、Y 52・53 主軸方向 N - 12.36° - W 規模 検出長 (3.83 m)、上端 0.4 ~ 0.5 m、下端 0.22 ~ 0.24 m、深さ 0.2 m。 形状等 南北方向へ走向しているが、調査区南壁際にて東西方向に向きを変える。断面形状は台形状を呈する。 重複 M - 2 号墳、W - 6・9 号溝と重複し、新旧関係は M - 2 → W - 6 → W - 9 → 本遺構の順である。 出土遺物 なし。 時期 重複関係と覆土の傾向から中世以降と想定される。

W-9号溝 (第 17 図、PL.15)

位置 X 28 ~ 30、Y 52・53 主軸方向 N - 65.46° - E 規模 検出長 (6.05 m)、上端 0.5 ~ 0.68 m、下端 0.3 ~ 0.36 m、深さ 0.16 m。 形状等 東西方向に走向し、断面形状は台形状を呈する。 重複 M - 2 号墳、W - 6・8・10 号溝と重複し、新旧関係は M - 2 → W - 10 → W - 6 → 本遺構 → W - 8 の順である。 出土遺物 土師器甕胴部が出土しているが、周辺古墳からの混入遺物と考えられる。 時期 本遺構に帰属する遺物がないため、重複関係と覆土の傾向から中世以降と想定される。

W-10号溝 (第17図、PL.14・15)

位置 X 28°30'・Y 52°53' 主軸方向 N - 40.42°-E 規模 検出長 (6.37 m)、上端 0.9 ~ 1.07 m、下端 0.7 m、深さ 0.16 m。 形状等 東西方向に走向し、断面形状は上端が大きく広がる弧状を呈する。 重複 M-2号墳、W-6・8・10号溝と重複し、新旧関係は M-2 → 本造構 → W-6 → W-9 → W-8 の順である。 出土遺物なし。 時期 重複関係と覆土の傾向から中世以降と想定される。

W-11号溝 (第16図、PL.15・16)

位置 X 30°31'・Y 46' 主軸方向 N - 17.1°-W 規模 検出長 (1.82 m)、上端 0.63 ~ 0.7 m、下端 0.35 ~ 0.4 m、深さ 0.37 m。 形状等 南北方向に走向し、断面形状は台形状を呈する。 重複 M-3号墳と重複し、新旧関係は M-3 → 本造構の順である。 出土遺物 円筒埴輪小片が出土しているが、周辺古墳の混入遺物と考えられる。 時期 本造構に帰属する遺物がないため、重複関係と覆土の傾向から 6世紀後半以降、中世以前と考えられる。

W-12号溝 (第18図、PL.16)

位置 X 35°36'・Y 44°49' 主軸方向 N - 2.5°-W 規模 検出長 (22.21 m)、上端 0.65 ~ 0.7 m、下端 0.21 ~ 0.28 m、深さ 0.45 m。 形状等 南西から北西方向へ弧を描くように走向し、断面形状は漏斗形状を呈する。 重複 J-1号住居跡、H-1号住居跡、M-4号墳、W-13号溝と重複し、新旧関係は J-1 → H-1 → M-4 → 本造構 → W-13 の順である。 出土遺物 S字状口縁台付壺や円筒埴輪の小片が出土している。 時期 本造構に帰属する遺物が不明なため、重複関係と覆土の傾向から 4世紀後半以降、中世以前と考えられる。

W-13号溝 (第18図、PL.16)

位置 X 35°36'・Y 45°46' 主軸方向 N - 35.69°-W 規模 検出長 (3.29 m)、上端 0.33 ~ 0.42 m、下端 0.24 ~ 0.34 m、深さ 0.07 m。 形状等 南東から北西方向は走向し、断面形状は弧状を呈する。 重複 W-12号溝と重複し、新旧関係は W-12 → 本造構の順である。 出土遺物 S字状口縁台付壺や円筒埴輪の小片が出土しているが、周辺古墳の混入遺物と考えられる。 時期 本造構に帰属する遺物がないため、重複関係と覆土の傾向から 4世紀後半以降、中世以前と考えられる。

W-14号溝 (第16図、PL.16)

位置 X 37'・Y 48' 主軸方向 N - 56.8°-E 規模 検出長 (2.19 m)、上端 0.18 ~ 0.28 m、下端 0.09 ~ 0.15 m、深さ 0.19 m。 形状等 東西方向に走向し、断面形状はU字状を呈する。 重複 M-4号墳と重複し、新旧関係は本造構 → M-4 の順である。 出土遺物 なし。 時期 重複関係と覆土の傾向から 4世紀中葉以前と想定される。

W-15号溝 (第16図、PL.16)

位置 X 34°35'・Y 43°44' 主軸方向 N - 12.89°-W 規模 検出長 (3.67 m)、上端 1.15 ~ 1.3 m、下端 0.37 ~ 0.5 m、深さ 0.33 m。 形状等 南北方向に走向し、断面形状は弧状を呈する。 重複 H-1号住居跡と重複し、新旧関係は本造構 → H-1 の順である。 出土遺物 中期の深鉢小片が出土している。 時期 覆土や出土遺物の傾向から繩文時代中期と想定される。

(4) 土坑

D-1号土坑（第19図、PL.17）

X 32、Y 47に位置する。現耕作土下から検出され、覆土にAs-B軽石が混じる砂質土である。規模は長軸1.01m、短軸0.86m、深さ0.08mを測り、平面形状は円形、断面形状は台形状を呈する。出土遺物はなく、覆土の傾向から本遺構の時期は中世以降、上面はすでに削平されていると想定される。

D-2号土坑（第19図、PL.14・17）

X 30、Y 52に位置する。As-B混土層下から検出され、覆土にAs-B軽石が混じる砂質土である。規模は長軸1.12m、短軸1.06m、深さ0.25mを測り、平面形状は円形、断面形状は台形状を呈する。M-2号墳とW-6号溝と重複し、新旧関係はM-2→本遺構→W-6である。出土遺物はなく、覆土の傾向から本遺構の時期は中世以降、上面はすでに削平されていると想定される。

D-3号土坑（第19図、PL.17）

X 34、Y 46に位置する。As-C混土層下中から検出され、覆土にAs-C軽石が混じる。規模は長軸2.49m、短軸0.94m、深さ0.35mを測り、平面形状は南北に長い長方形、断面形状はV字形状を呈する。H-4号住居跡と重複し、新旧関係はH-4→本遺構である。出土遺物はなく、重複関係と覆土の傾向から本遺構の時期は6世紀後半以降、中世以前と考えられる。

D-4号土坑（第19図、PL.17）

X 37、Y 48に位置する。As-C混土層中から検出され、覆土に白色軽石が混じる。規模は長軸2.49m、短軸0.94m、深さ0.48mを測り、平面形状は南北に長い楕円形、断面形状は台形状を呈する。M-4号墳と重複し、新旧関係は本遺構→M-4である。覆土中からS字状口縁台付甕が出土しており、出土遺物や重複関係の傾向から本遺構の時期は4世紀前半～中葉と想定される。

D-5号土坑（第19図、PL.17）

X 36、Y 48に位置する。As-C混土層中から検出され、覆土にAs-C軽石が混じる。規模は長軸1.22m、短軸(0.5m)、深さ0.45mを測り、平面形状は不整形、断面形状は弧状を呈する。M-4号墳と重複し、新旧関係は本遺構→M-4である。覆土中からS字状口縁台付甕が出土しており、出土遺物や重複関係の傾向から本遺構の時期は4世紀前半～中葉と想定される。

D-6号土坑（第19図、PL.17・18）

X 34・35、Y 46に位置する。As-C混土層下から検出され、覆土に黒色土を主体としてローム粒が混じる。規模は長軸2.28m、短軸1.21m、深さ0.22mを測り、平面形状は南北に長い楕円形、断面形状は台形状を呈する。重複遺構、出土遺物はなく、覆土の傾向から本遺構の時期は縄文時代と想定される。

D-7号土坑（第19図、PL.18）

X 34、Y 44・45に位置する。As-C混土層下から検出され、覆土に黒色土を主体としてローム粒が混じる。規模は長軸(1.52m)、短軸(1.35m)、深さ0.26mを測り、平面形状は不整形、断面形状も不整形である。H-2号住居跡と重複し、新旧関係は本遺構→H-2である。覆土中から石皿(1)が出土しており、覆土や出土遺物の傾向から本遺構の時期は縄文時代中期と想定される。

D-8号土坑（第19図、PL.18）

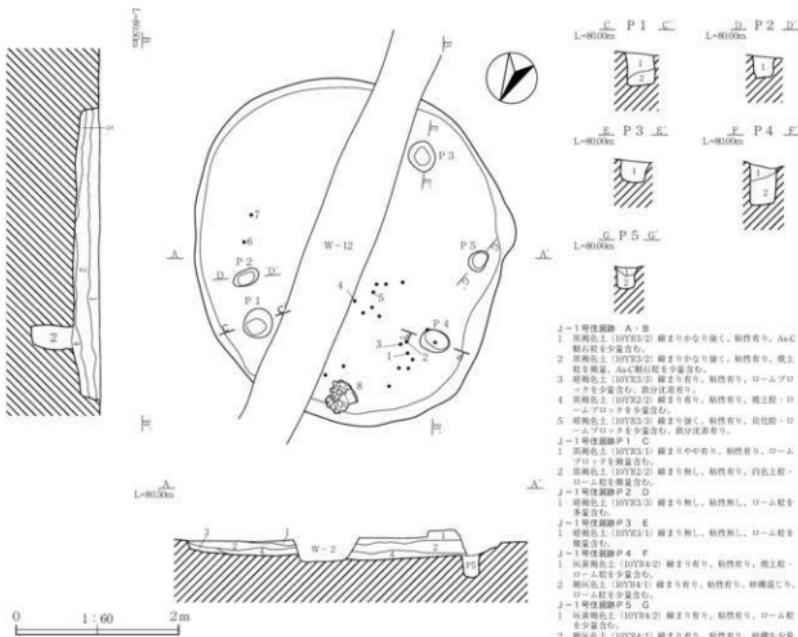
X 33、Y 44・45に位置する。As-C混土層下から検出され、覆土に黒色土を主体としてローム粒が混じる。規模は長軸(2.99m)、短軸(0.95m)、深さ0.51mを測り、平面形状は南北に長い長方形、断面形状はU字形を呈する。W-1号溝、H-4号住居跡と重複し、新旧関係は本遺構→H-4→W-1である。覆土中から勝坂1式（1）、阿玉台1b式（2）の深鉢が出土しており、出土遺物や覆土の傾向から本遺構の時期は縄文時代中期と想定される。

D-9号土坑（第19図、PL.18）

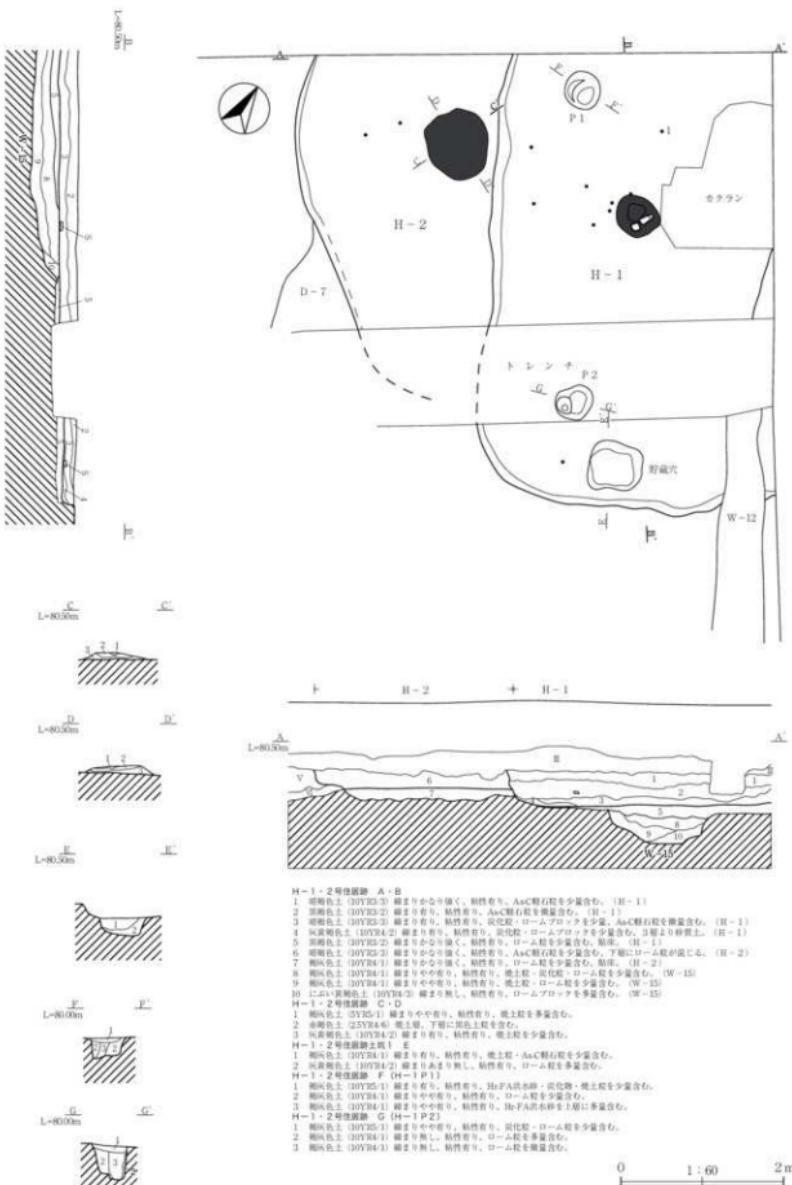
X 33、Y 46・47に位置する。As-C混土層下から検出され、覆土に黒色土を主体としてローム粒が混じる。規模は長軸1.41m、短軸0.94m、深さ0.50mを測り、平面形状は楕円形、断面形状は弧状を呈する。H-3・4号住居跡と重複し、新旧関係は本遺構→H-3→H-4である。出土遺物はなく、重複関係と覆土の傾向から本遺構の時期は縄文時代と想定される。

第2表 ピット計測表

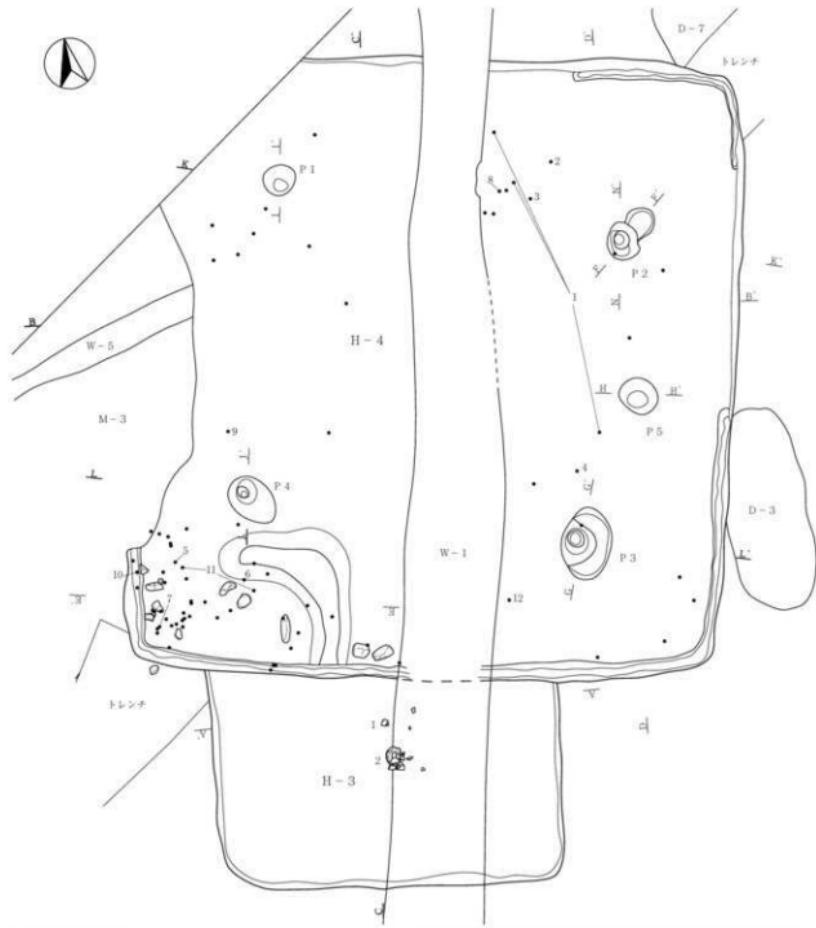
遺構名	位	座	長軸	短軸	深さ	平面形状	遺構名	位	座	長軸	短軸	深さ	平面形状	遺構名	位	座	長軸	短軸	深さ	平面形状			
P-1	2	24.	Y 46	0.3	0.26	0.21	△	P-2	2	22.	Y 46	0.26	0.17	0.21	△	P-3	2	20.	Y 45	0.29	0.27	0.22	△
P-4	3	31.	Y 45	0.32	0.36	0.36	△																



第7図 J-1住居跡

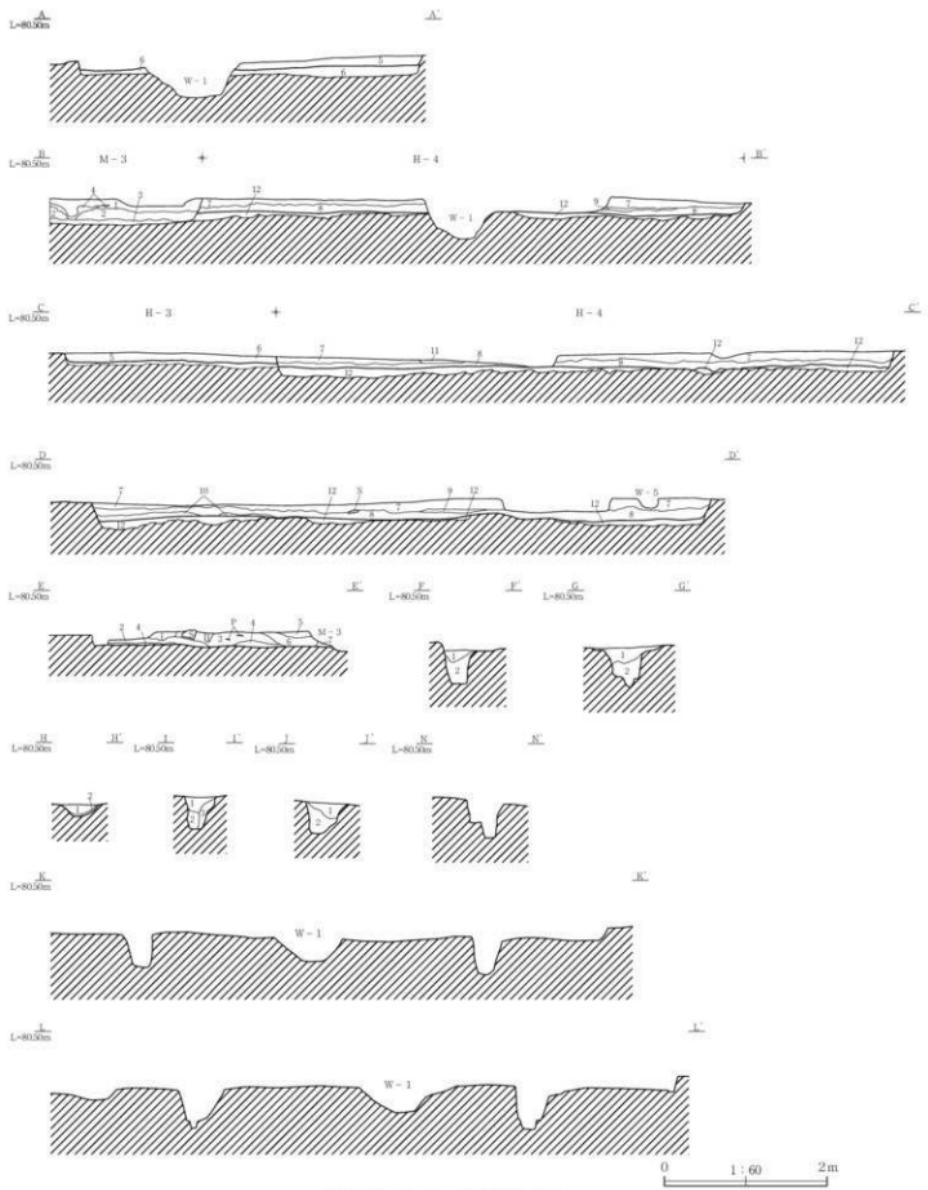


第8図 H-1・2号住居跡

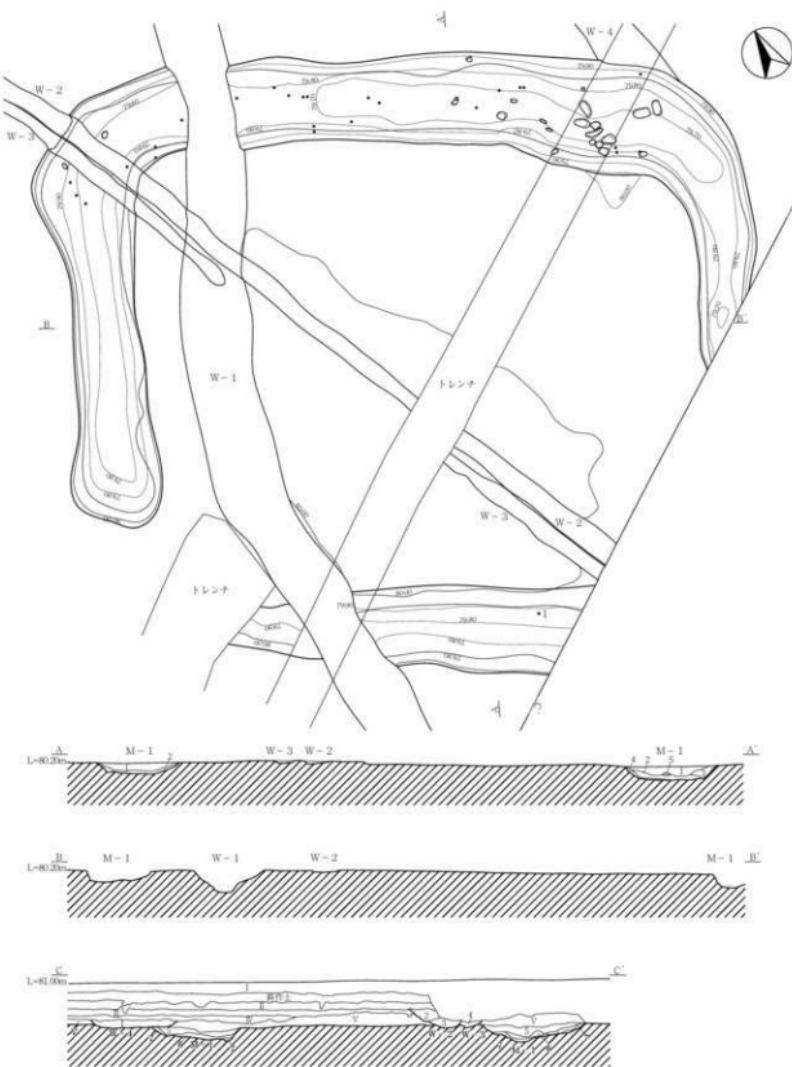


- H-3・4号居室跡 A～D
- 黒褐色土 (10YR3/2) 糜まり有り。粘性有り。白泥土粒を少量含む。(M-3)
 - 黒褐色土 (10YR3/2) 糜まり有り。粘性有り。ロームブロックを微量。As-C鉄石粒を少量含む。(M-3)
 - 黒褐色土 (10YR4/3) 糜まり有り。粘性有り。ローム粒を多量含む。砂質土。(M-3)
 - 灰褐色土 (10YR6/3) 16g/FAs粘土鉱物、2層混じる。(M-3)
 - 暗褐色土 (10YR4/3) 糜まり有り。粘性有り。堆土粒・ローム粒を少量含む。(H-3)
 - 黒褐色土 (10YR4/3) 糜まり有り。粘性有り。ローム粒を少量含む。As-C鉄石粒を少量含む。(H-3)
 - 黒褐色土 (10YR4/3) 糜まり有り。粘性有り。ローム粒を微量。As-C鉄石粒を少量含む。(H-4)
 - 黒褐色土 (10YR3/3) 糜まり有り。粘性有り。ローム粒を微量。As-C鉄石粒を少量含む。(H-4)
 - 黒褐色土 (10YR3/2) 糜まり有り。粘性有り。堆土粒・氯化物・ローム粒を微量含む。(H-4)
 - 黒褐色土 (10YR4/3) 糜まり有り。粘性有り。堆土粒・氯化物・ローム粒を微量含む。(H-4)
 - 黒褐色土 (10YR4/3) 糜まり有り。粘性有り。堆土粒を少量。ローム粒を微量。As-C鉄石粒を少量含む。(H-4)
 - 黒褐色土 (10YR2/2) 糜まり有り。粘性有り。堆土粒を少量含む。粘土。(H-4)
 - 暗褐色土 (10YR3/2) 糜まり有り。粘性有り。堆土粒・氯化物・ローム粒を微量含む。As-C鉄石粒を少量含む。(H-4)
 - 暗褐色土 (10YR2/2) 糜まり有り。粘性有り。堆土粒を少量含む。粘土。(H-4)
- H-3・4号居室跡 E
- 黒褐色土 (10YR3/2) 糜まり有り。粘性有り。ローム粒を微量。As-C鉄石粒を少量含む。
 - 黒褐色土 (10YR3/2) 糜まり有り。粘性有り。堆土粒を少量含む。氯化物・ローム粒を少量含む。
 - 黒褐色土 (10YR3/2) 糜まり有り。粘性有り。堆土粒を少量含む。As-C鉄石粒を微量含む。粘土。
 - 灰褐色土 (10YR2/2) As・氯化物。堆土粒を微量含む。

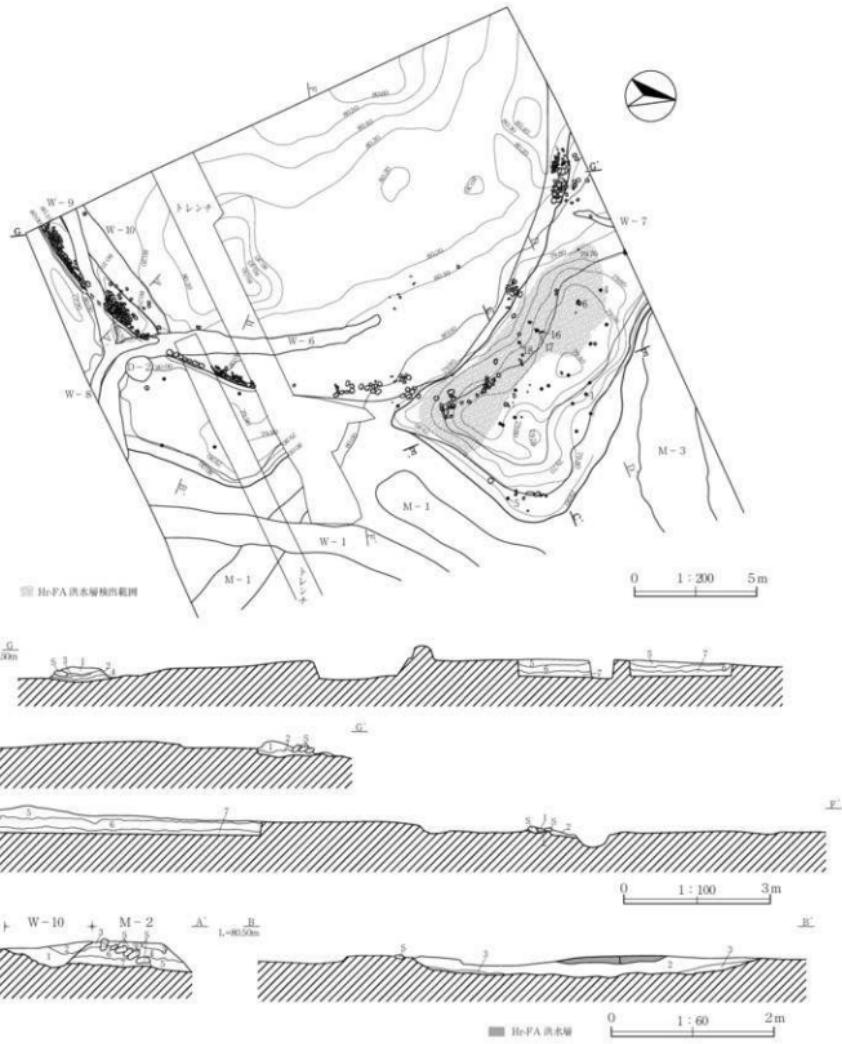
第9図 H-3・4号居室跡 (1)



第10図 H-3・4号住居跡(2)

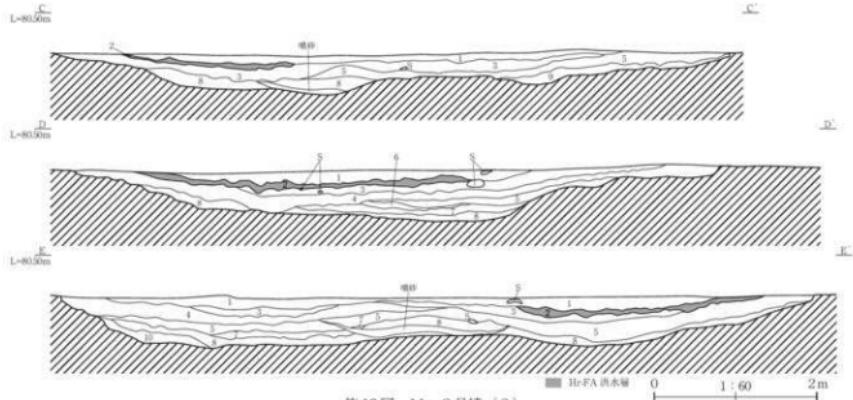
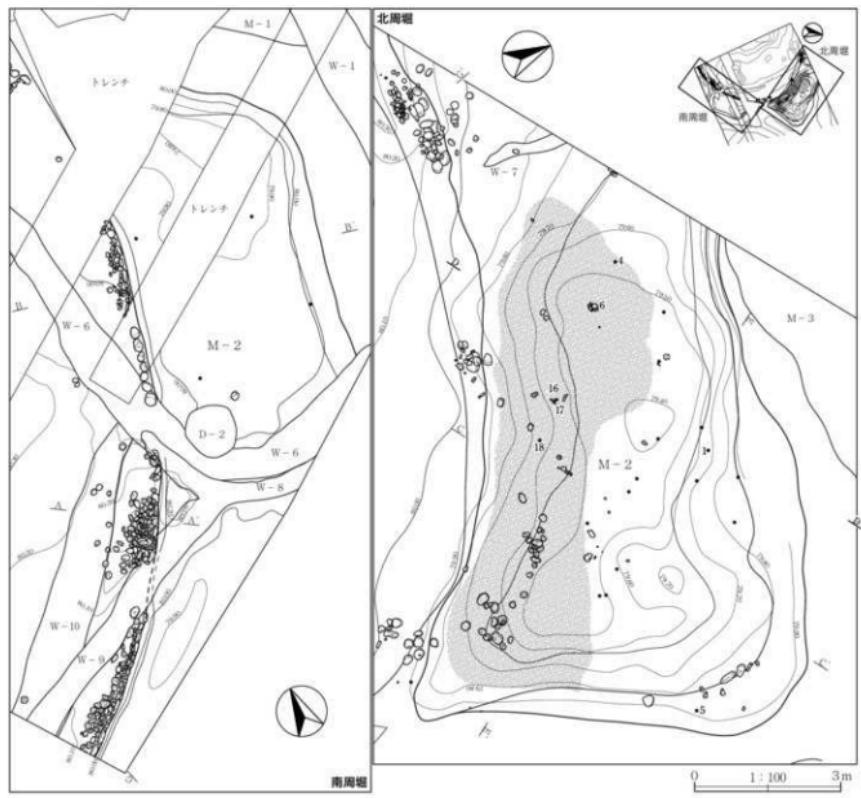


第11図 M-1号溝測量



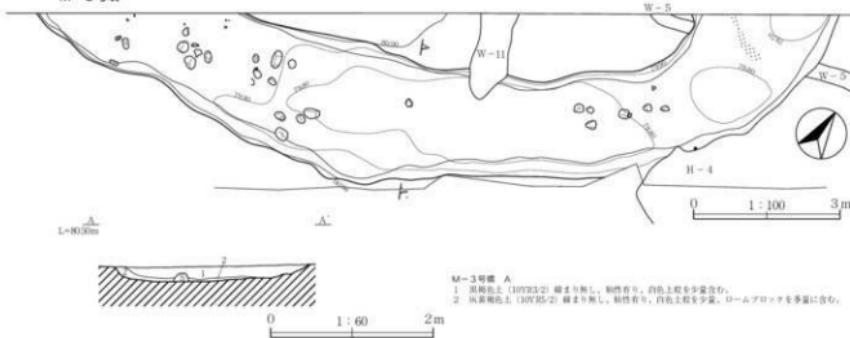
- M-2号坑・W-10号溝 A**
 1 布岩角土 (DOY4/4-2) 繼まり無し。粘性有り。ロームブロック・AsC粗粒石を少量含む。砂質土。(W-10)
 2 褐炭灰土 (DOY4/4-2) 繼まり無し。粘性有り。AsC粗粒石を少量含む。鉄分沈没有り。少量含む。(W-10)
 3 黄褐色土 (DOY4/4-3) 繼まり無し。粘性有り。AsC粗粒石を少量含む。少量含む。(M-2)
 4 黄褐色土 (DOY3-1) 繼まり無し。粘性有り。AsC粗粒石を少量含む。地表粗粒土を少量含む。(M-2)
 5 黑褐色土 (DOY3-1) 繼まり無し。粘性有り。ローム粒・白母鈣石を少量含む。地表土を少量含む。頗るの
 頗るの。(M-2)
 6 黄褐色土 (DOY3-1) 繼まり無し。粘性有り。ローム粒を多量含む。(M-2)
 7 じぶん細粒土 (DOY3-3) 繼まりやや有り。粘性有り。ローム粒・ロームブロックを多量含む。(M-2)
- M-2号坑 B**
 1 布岩角土 (DOY3-3) Hr-FA混水層。
 2 黄褐色土 (DOY3-3) 繼まり無し。粘性有り。地表粗粒・ロームブロックを少量含む。AsC粗粒石を多量含む。
 3 じぶん細粒土 (DOY3-3) 繼まりやや有り。粘性有り。ロームブロックを多量含む。
- M-2号坑 C-1**
 1 黄褐色土 (DOY3-4) 繼まり前り。粘性有り。Hr-FA混水層を少量。AsC粗粒石を少量含む。
 2 明褐色土 (DOY3-4) 3割にHr-FA混水層を多量に含む。Hr-FA混水層。
 3 黄褐色土 (DOY3-4) 繼まり前り。粘性有り。地表粗粒を多量含む。
 4 黑褐色土 (DOY3-2) 繼まり有り。粘性有り。地表粗粒を多量含む。
 5 黄褐色土 (DOY3-2) 繼まり有り。粘性有り。ローム粒を多量含む。
 6 黑褐色土 (DOY3-2) 繼まり有り。粘性有り。ローム粒を少量含む。
 7 黄褐色土 (DOY3-2) 繼まり有り。粘性有り。ローム粒を多量含む。
 8 じぶん細粒土 (DOY3-4) 繼まりやや有り。粘性有り。ローム粒を多量含む。底層の粗集土か?
 9 黄褐色土 (DOY3-4) 繼まり有り。粘性有り。地表粗粒を多量含む。底層の粗集土か?
 10 黑褐色土 (DOY3-4) 繼まり無し。粘性有り。ローム粒・ロームブロックを多量含む。砂質土。

第12図 M-2号坑 (1)

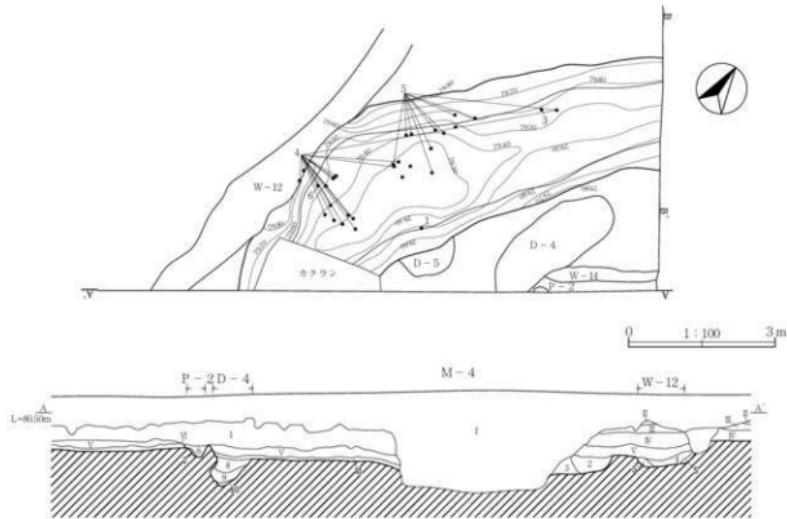


第13図 M-2号墳 (2)

M-3号墳



M-4号墳

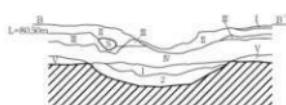


M-4号墳 W-12(横) D-4(土質) P-2(地ビト)

1 地下鉄道上 (10TH4-1) 砂より少く、砂層に夹有り。粘性有り。AsC鉱石層。ローム層を少量含む。厚層底土。 (M-4)
2 地下鉄道上 (10TH4-1) 砂より少く、砂層に夹有り。粘性有り。AsC鉱石層。ローム層を少量含む。厚層底土。 (M-4)
3 地下鉄道上 (10TH4-2) 砂より有り。粘性有り。D-4層を少量含む。 (W-12)
4 地下鉄道上 (10TH4-2) 砂より有り。粘性有り。D-4層を少量含む。 (W-12)
5 地下鉄道上 (10TH4-2) 砂より有り。粘性有り。D-4層を少量含む。 (W-12)
6 地下鉄道上 (10TH4-2) 砂より有り。粘性有り。D-4層を少量含む。 (W-12)
7 地下鉄道上 (10TH4-2) 砂より有り。粘性有り。ローム層を多量含む。 (P-2)
8 地下鉄道上 (10TH4-2) 砂より有り。粘性有り。AsC鉱石層を少量含む。 (D-4)
9 地下鉄道上 (10TH4-2) 砂より有り。粘性有り。AsC鉱石層を少量含む。 (D-4)
10 地下鉄道上 (10TH4-2) 砂より有り。粘性有り。ローム層を少量含む。 (D-4)

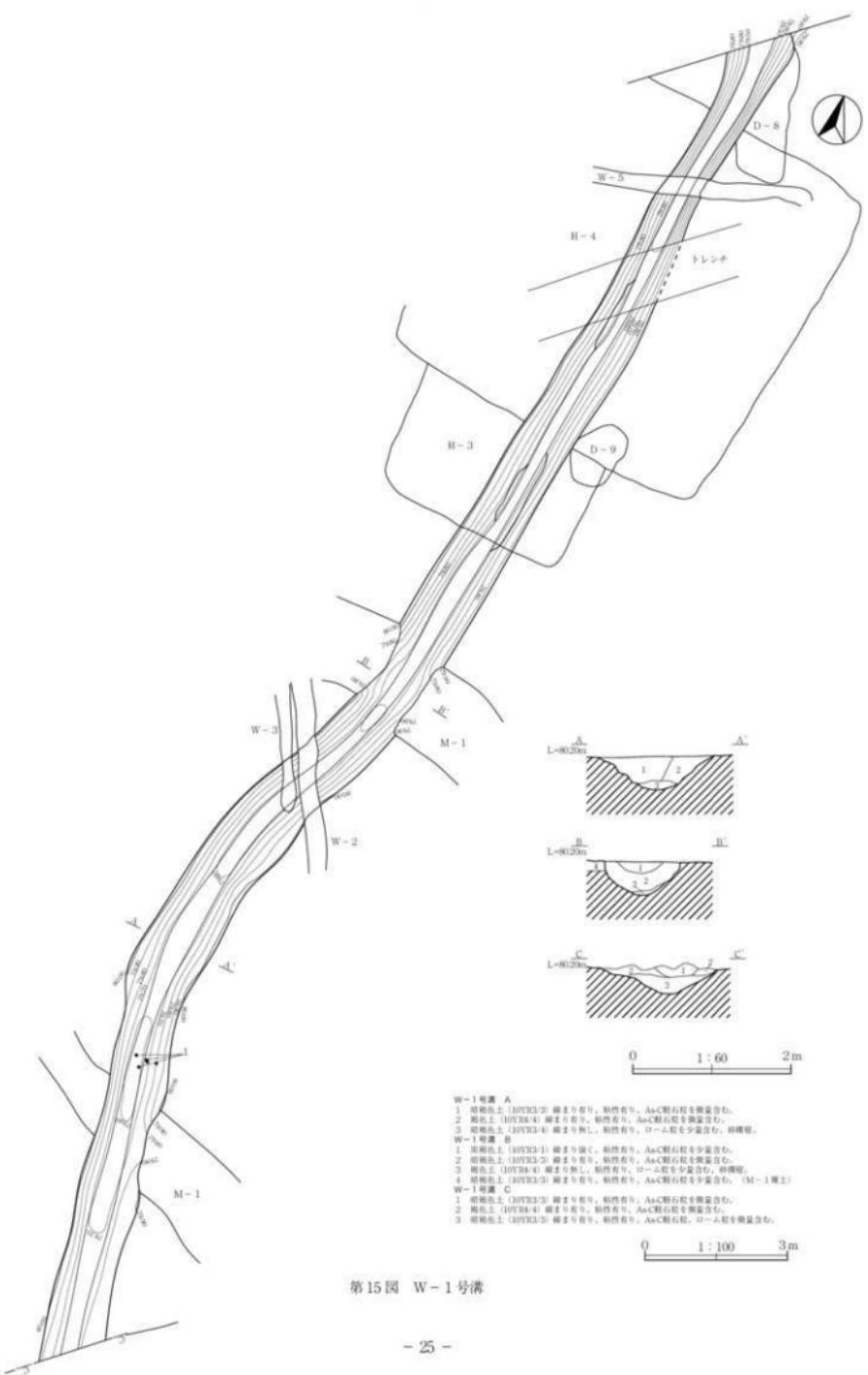
M-4号墳 B

1 地下鉄道上 (10TH3-2) 砂より少く有り。粘性有り。AsC鉱石層。ローム層を少量含む。
2 地下鉄道上 (10TH4-2) 砂より少く有り。粘性有り。AsC鉱石層を少量含む。下部は中砂質土。

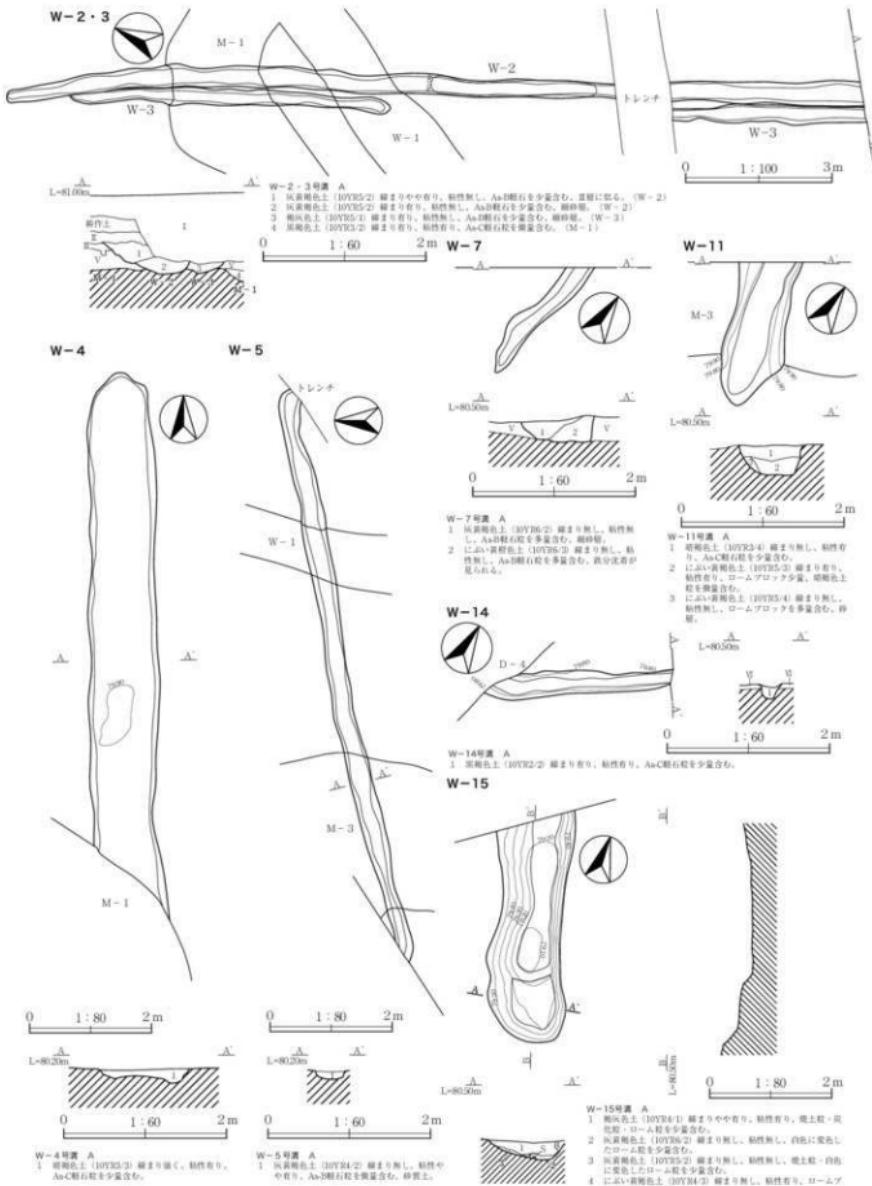


0 1:80 2m

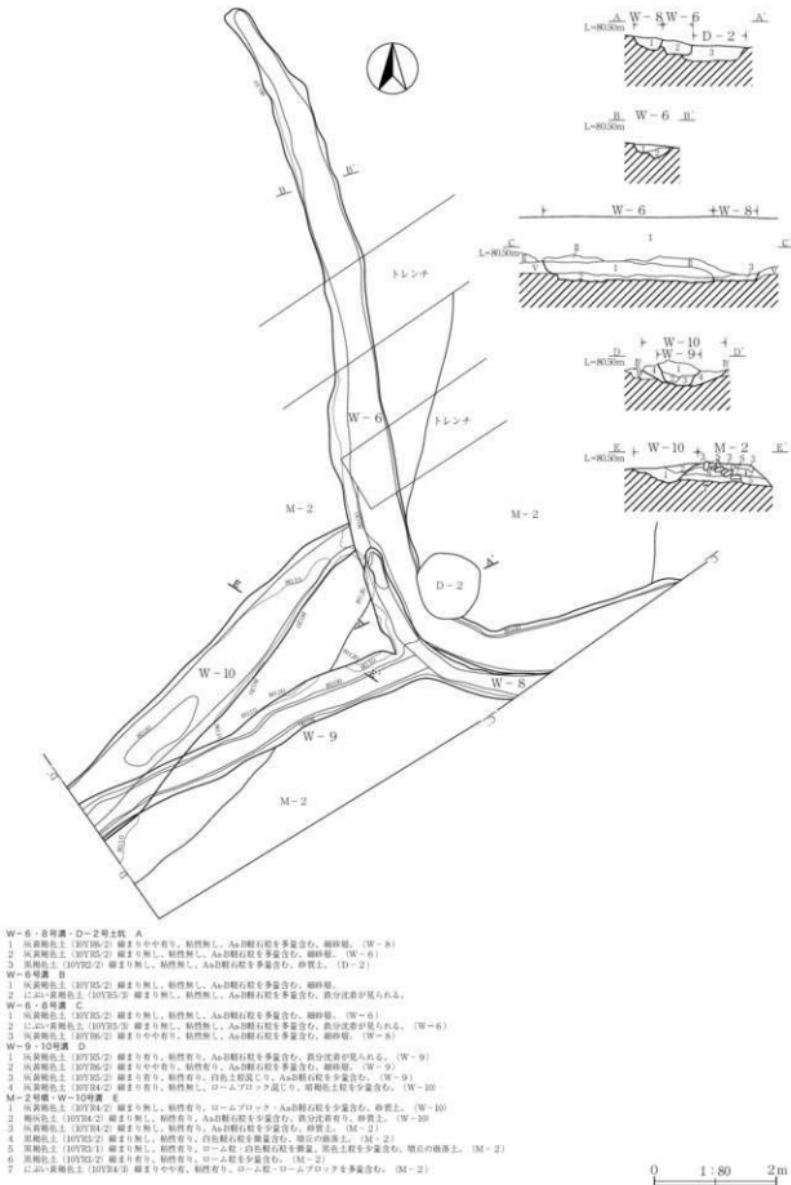
第14図 M-3・4号墳



第15圖 W-1號溝



第16図 W-2・3・4・5・7・11・14・15号溝



第17図 W-6 - 8 - 9 - 10号溝

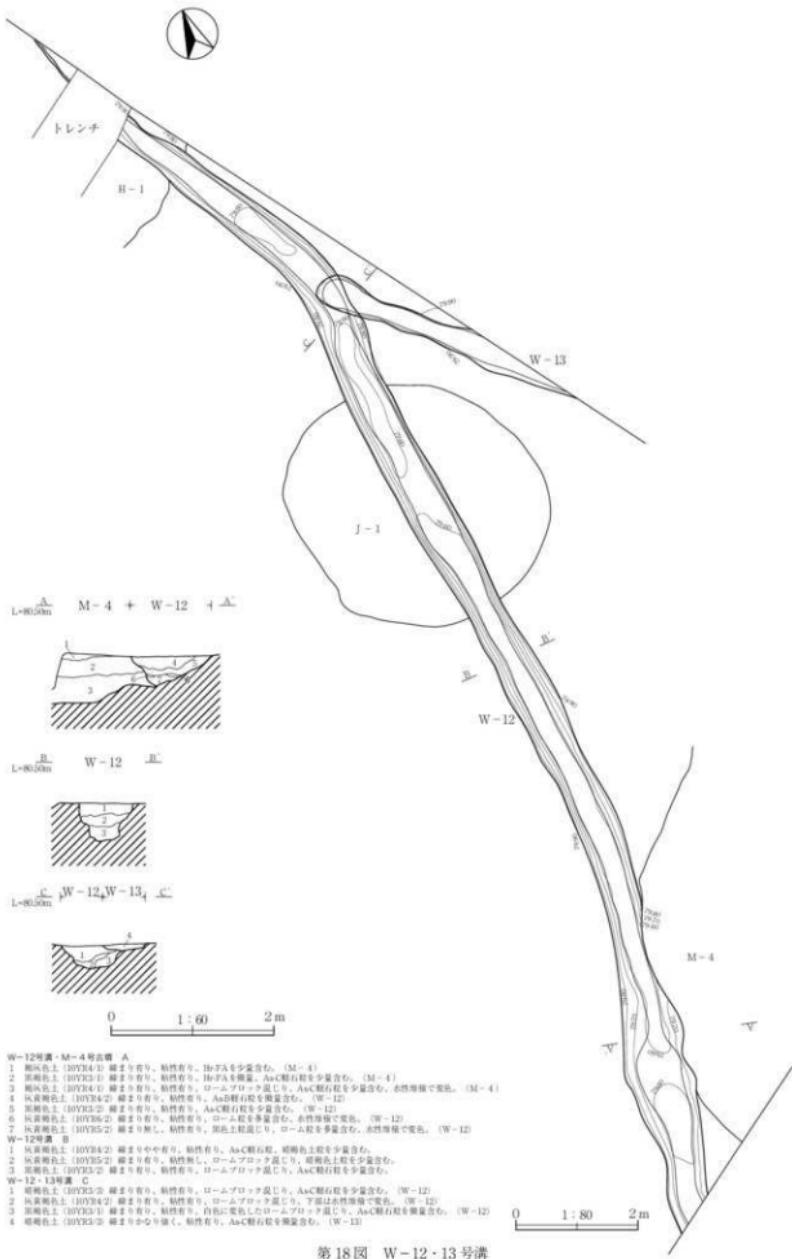
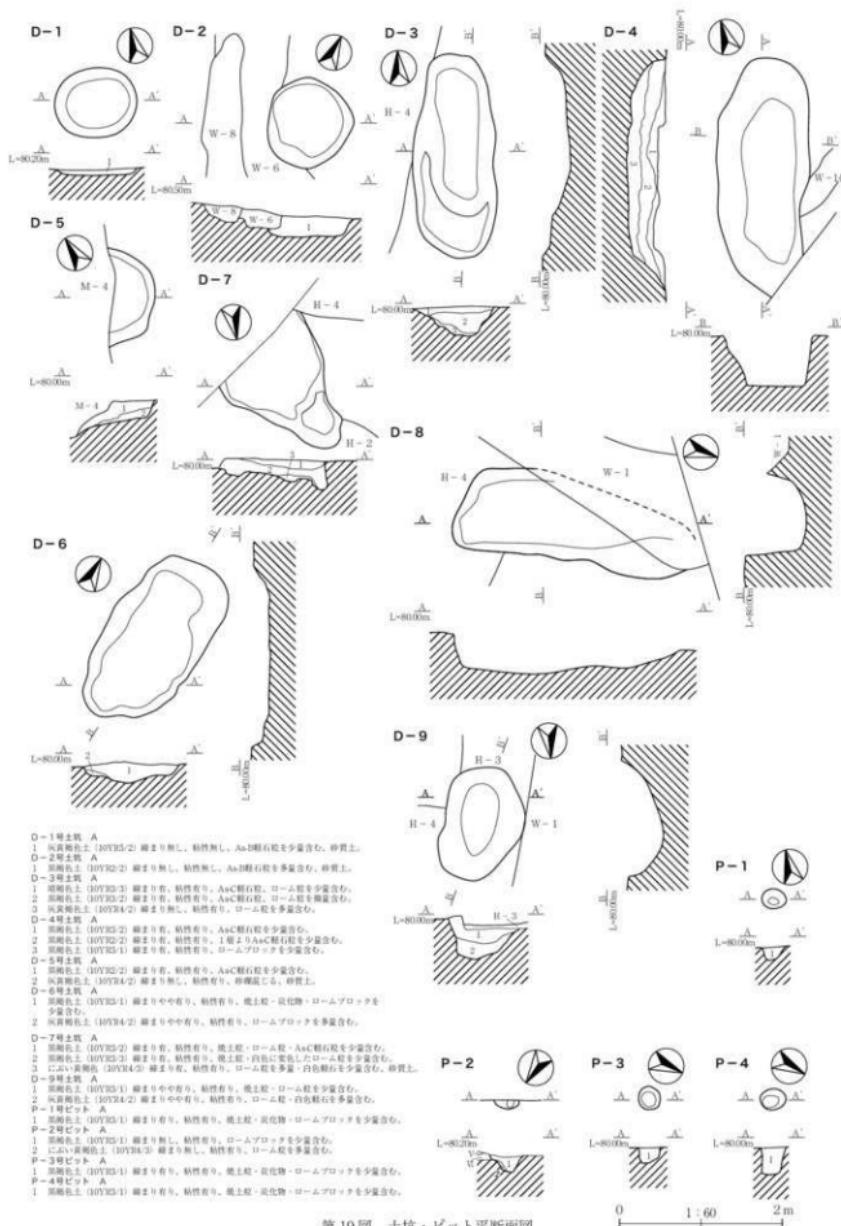
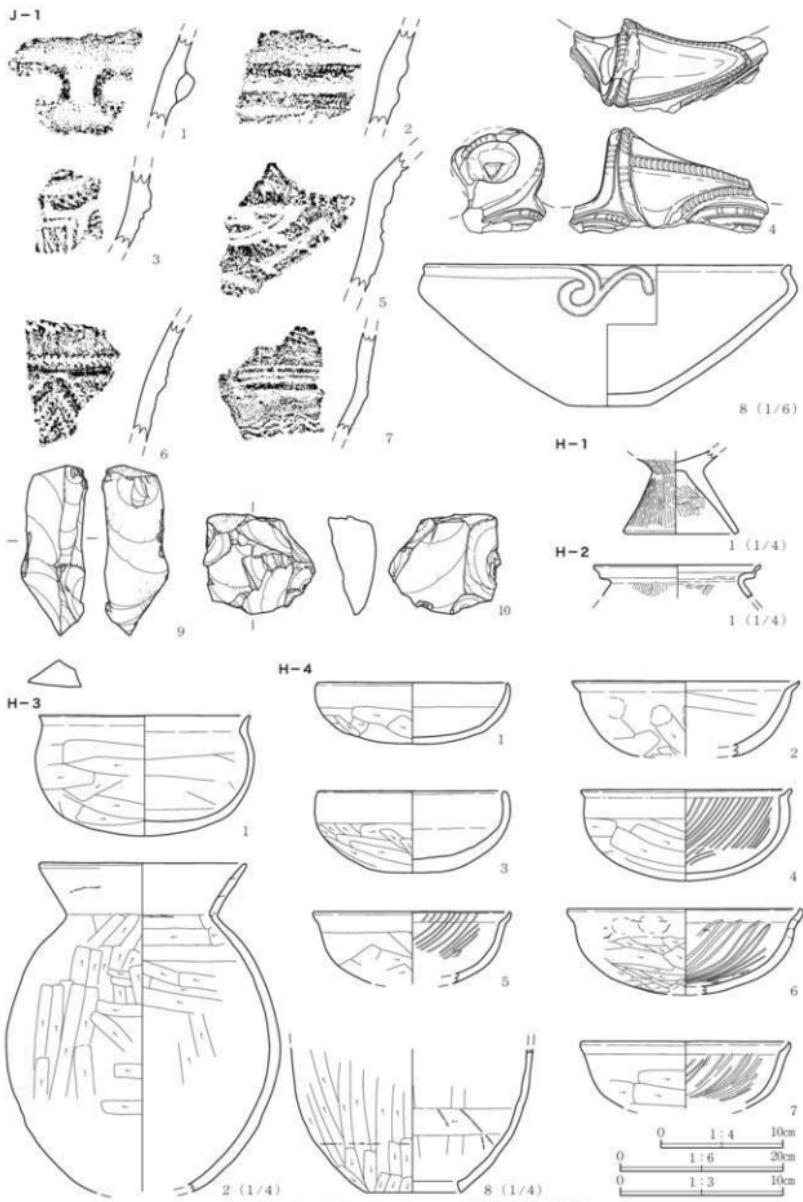
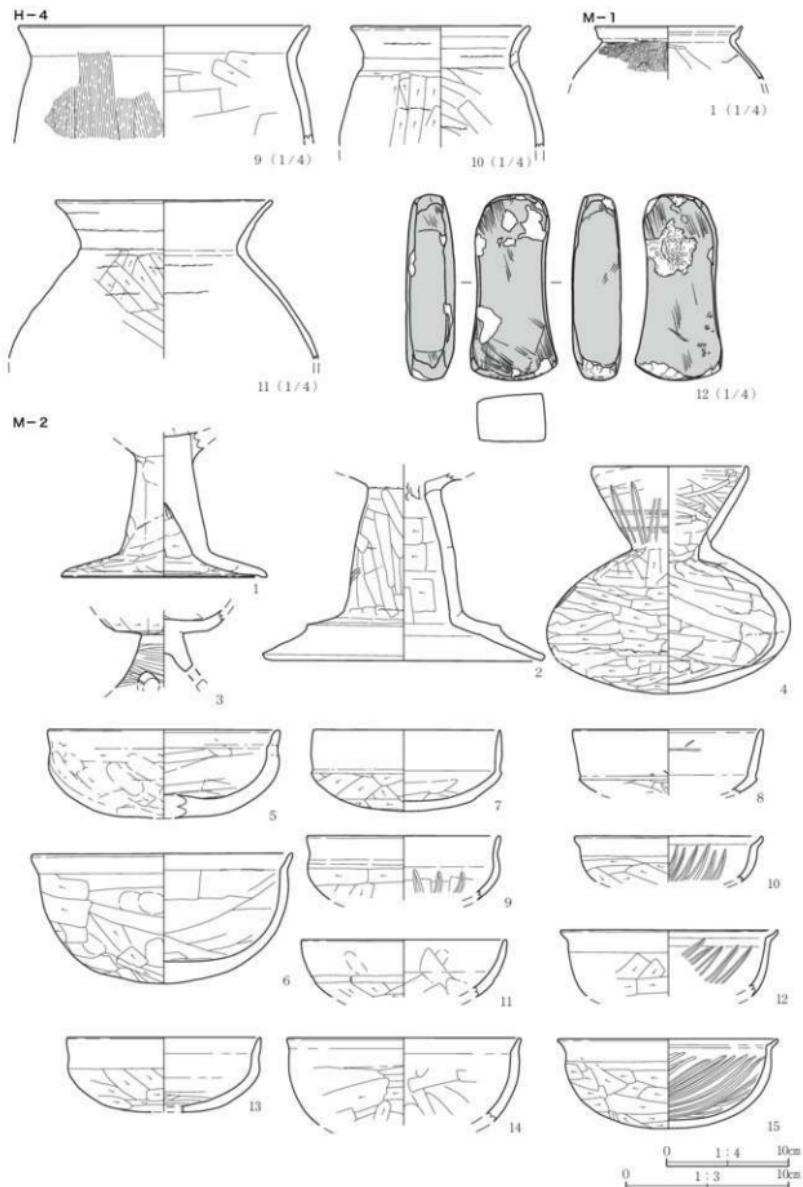


図18 W-12・13号溝



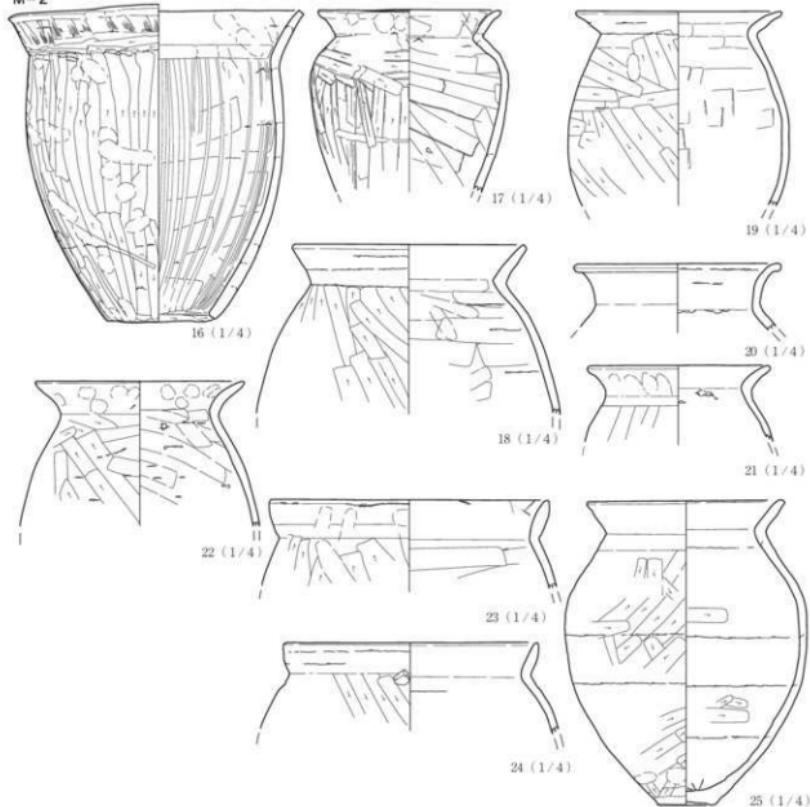
第19図 土坑・ピット断面図



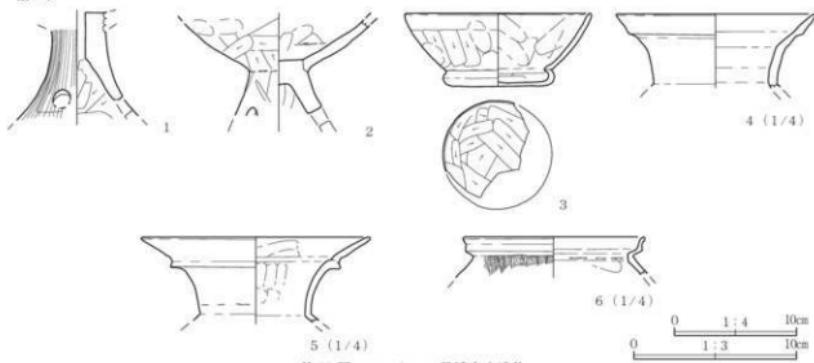


第21図 H-4号住居跡、M-1号周溝墓、M-2号出土遺物

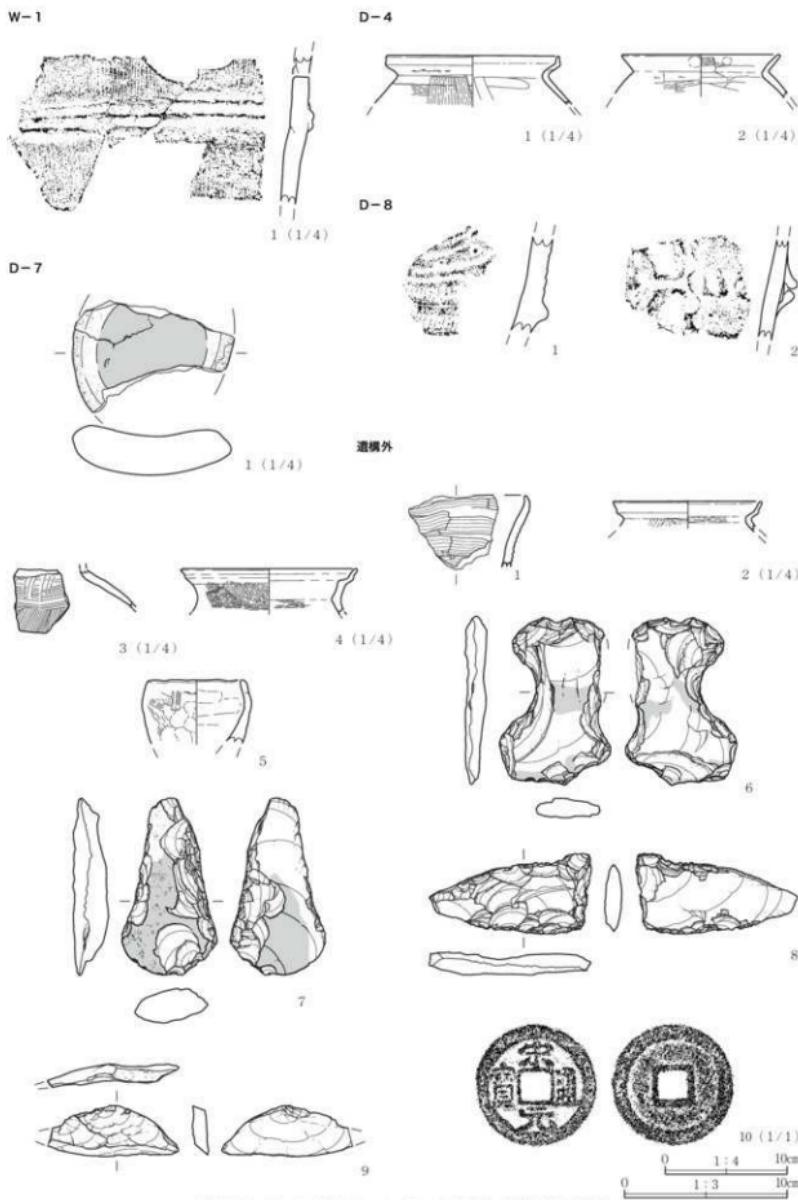
M-2



M-4



第22図 M-2・4号墳出土遺物



第23図 W-1号溝、D-4・7・8号土坑、遺構外出土遺物

第3表 出土遺物観察表

J-1号住居跡

No	出土位置	種別	器形	口径	底径	高さ	土質	焼成	色調	断面、成・型態、文様等の特徴	現状状況・備考
1	J-1 No.6	陶器	灰陶	—	—	15.1	厚手・内側無釉。 チャート軽鉢	良好	内・外・灰陶	丸筒窯の外側、荷重を支えているのが確認できる。	現状小片。 現状2点。1点は式。
2	J-1 No.7	陶器	灰陶	—	—	15.0	白・灰色軽鉢	良好	内・灰陶	丸筒窯の内側を盛土する土高座が認められ、立脚の下部等、下脚には手筋留付に荷重を支えている。	現状小片。 現状2点。
3	J-1 No.8	陶器	灰陶	—	—	14.2	白・灰色軽鉢	底層	内・灰陶	丸筒窯の外側には荷重がある立脚が認められ、手筋留に沿って洗面が施され、蓮唐草の文様が施されている。	現状小片。
4	J-1 No.14	陶器	灰陶	12.9	10.6	14.2	第一・白色軽鉢	底層	内・灰陶	丸筒窯の外側を盛土する立脚が認められ、立脚の下部には手筋留が認められる。立脚の上部には人頭形の手鍵付による洗面が認められる。	現状焼失現状。
5	J-1 No.20	陶器	灰陶	—	—	14.2	白・灰色軽鉢	底層	内・灰陶	丸筒窯の外側を盛土する立脚が認められる。立脚の下部には手筋留が認められる。	現状2点。
6	J-1 No.21	陶器	灰陶	—	—	12.8	厚手の、灰色軽鉢	底層	内・灰陶	丸筒窯の外側を盛土する立脚が認められる。立脚の下部には手筋留が認められる。手筋留に沿って洗面が施され、立脚の上部には手筋留が認められる。	現状小片。 現状2点。
7	J-1 No.22	陶器	灰陶	—	—	12.2	第一・白色軽鉢	底層	内・灰陶	丸筒窯から手平に至る工事場を有する立脚が認められ、立脚の下部には手筋留が認められる。	現状小片。 河岸式。
8	J-1 No.23	陶器	灰陶	—	—	14.0	厚手の、白色軽鉢	底層	内・灰陶	丸筒窯から手平に至る工事場を有する立脚が認められる。	現状2点。
No	出土位置	種別	器形	長径	幅	厚さ	土質	焼成	色調	断面、成・型態、文様等の特徴	現状状況・備考
9	J-1 No.24	陶器	灰陶	10.5	8.6	2.3	直鉢	—	—	立脚の外側には手筋留が認められる。立脚の上部には手筋留が認められる。	現状2点。
10	J-1 No.25	陶器	灰陶	8.2	8.0	2.1	直鉢	—	—	立脚の外側には手筋留が認められる。	現状。

H-1号住居跡

No	出土位置	種別	器形	口径	底径	高さ	土質	焼成	色調	断面、成・型態、文様等の特徴	現状状況・備考
1	H-1 No.1	陶器	灰陶	—	—	16.0	厚手の、素面	底層	明赤陶	内部白帯付・灰陶。	台面3点現存。

H-2号住居跡

No	出土位置	種別	器形	口径	底径	高さ	土質	焼成	色調	断面、成・型態、文様等の特徴	現状状況・備考
1	H-2 No.2	陶器	灰陶	—	—	22.7	白色灰、素面	底層	明赤陶	内部白帯付・灰陶。	立脚部小片。

H-3号住居跡

No	出土位置	種別	器形	口径	底径	高さ	土質	焼成	色調	断面、成・型態、文様等の特徴	現状状況・備考
1	H-3 No.2	陶器	灰陶	—	—	11.4	白色灰、素面	底層	明赤陶	外部に暗赤コラボリ、底付ハカリ。	立脚部1点現存。
2	H-3 No.3	陶器	灰陶	—	—	11.4	白色灰、素面	底層	明赤陶	外部に暗赤コラボリ、底付ハカリ。	立脚部1点現存。

H-4号住居跡

No	出土位置	種別	器形	口径	底径	高さ	土質	焼成	色調	断面、成・型態、文様等の特徴	現状状況・備考	
1	H-4 No.1	陶器	灰陶	—	—	11.4	白色灰、素面	底層	明赤陶	外部に暗赤コラボリ、底付ハカリ。	立脚部1点現存。	
2	H-4 No.2	陶器	灰陶	—	—	11.4	白色灰、素面	底層	明赤陶	外部に暗赤コラボリ、底付ハカリ。	立脚部1点現存。	
3	H-4 No.3	陶器	灰陶	—	—	11.4	白色灰、素面	底層	明赤陶	外部に暗赤コラボリ、底付ハカリ。	立脚部1点現存。	
4	H-4 No.12	陶器	灰陶	—	—	11.9	白色灰、素面	底層	明赤陶	外部に暗赤コラボリ、底付ハカリ。	立脚部1点現存。	
5	H-4 No.14	陶器	灰陶	—	—	11.0	白色灰、素面	底層	明赤陶	外部に暗赤コラボリ、底付ハカリ。	立脚部1点現存。	
6	H-4 No.16	陶器	灰陶	—	—	11.0	第一・白色灰、素面	底層	明赤陶	外部に暗赤コラボリ、底付ハカリ。	立脚部1点現存。	
7	H-4 No.17	陶器	灰陶	—	—	11.1	白色灰、素面	底層	明赤陶	外部に暗赤コラボリ、底付ハカリ。	立脚部1点現存。	
8	H-4 No.18	陶器	灰陶	—	—	11.0	白色灰、素面	底層	明赤陶	外部に暗赤コラボリ、底付ハカリ。	立脚部1点現存。	
9	H-4 No.21	陶器	灰陶	—	—	11.0	白色灰、素面	底層	明赤陶	外部に暗赤コラボリ、底付ハカリ。	立脚部1点現存。	
10	H-4 No.21+17	陶器	灰陶	—	—	10.0	白色灰、素面	底層	明赤陶	外部に暗赤コラボリ、底付ハカリ。	立脚部1点現存。	
11	H-4 No.27	陶器	灰陶	—	—	11.8	白色灰、素面	底層	明赤陶	外部に暗赤コラボリ、底付ハカリ。	立脚部1点現存。	
No	出土位置	種別	器形	長径	幅	厚さ	土質	焼成	色調	断面、成・型態、文様等の特徴	現状状況・備考	
12	H-4 No.28	陶器	灰陶	15.2	12.2	4.0	底層	—	—	628号	表面には手筋留が認められ、表面に手平には手筋留が認められる。	手筋留。

M-1号溝渠

No	出土位置	種別	器形	口径	底径	高さ	土質	焼成	色調	断面、成・型態、文様等の特徴	現状状況・備考
1	M-1 No.2	陶器	灰陶	—	—	12.2	白色灰、素面	底層	明赤陶	内部に手筋留が認められる。	現状1点現存。

M-2号古槽

No	出土位置	種別	器形	長径	幅	高さ	土質	焼成	色調	断面、成・型態、文様等の特徴	現状状況・備考
1	M-2 No.4	陶器	灰陶	—	—	12.2	白色灰、石英	底層	内・外・灰陶	外部に暗赤コラボリ、底付ハカリ。	現状1点。
2	M-2 No.5	陶器	灰陶	—	—	12.5	白色灰、石英	底層	内・灰陶	外部に暗赤コラボリ、底付ハカリ。	現状3点現存。
3	M-2 No.6	陶器	灰陶	—	—	12.0	第一・白色灰、石英	底層	内・灰陶	外部に暗赤コラボリ、底付ハカリ。	現状1点現存。
4	M-2 No.7	陶器	灰陶	—	—	12.0	第一・白色灰、石英 チャート軽鉢	底層	内・灰陶	外部に暗赤コラボリ、底付ハカリ。	現状1点現存。
5	M-2 No.20	陶器	灰陶	—	—	12.2	第一・白色灰、石英 手筋留	底層	内・灰陶	外部に暗赤コラボリ、底付ハカリ。	1点現存。

No	出土位置	種別	器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	断面、成・形態、文様等の特徴	現状状況・備考
6	M-2 36-22	2層目 内	直縁鉢	—	(12.0)	丸底	14.0	黄・白色系	灰質	内: 黄褐色 外: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。縦割れ有り。 内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。縦割れ有り。	3.4kg。有。
7	M-2 36-23	2層目 内	直縁鉢	—	(11.4)	丸底	4.0	白・白色系、黒斑	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	1.3kg。有。
8	西端部F.A.T.	2層目 内	直縁鉢	—	(11.0)	—	3.0	白色系	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	口縁部小片。
9	M-2 36-24	2層目 内	直縁鉢	—	(12.0)	—	3.0	白色系	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	1.3kg。有。
10	西端部F.A.T.	2層目 内	直縁鉢	—	(11.6)	—	2.0	白・白色系、黒斑	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	口縁部小片。
11	M-2 36-25	2層目 内	直縁鉢	—	(11.1)	—	3.0	白色系	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	1.3kg。有。
12	西端部F.A.T.	2層目 内	直縁鉢	—	(11.0)	—	3.0	白・白色系、黒斑	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	1.3kg。有。
13	西端部F.A.T.	2層目 内	直縁鉢	—	(11.0)	—	3.0	白色系	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	1.3kg。有。
14	M-2 36-26	2層目 内	直縁鉢	—	(11.4)	—	3.0	白色系	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	1.3kg。有。
15	西端部F.A.T.	2層目 内	直縁鉢	—	(11.4)	—	3.0	白色系	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	1.3kg。有。
16	M-2 36-27	2層目 内	直縁鉢	—	(11.2)	—	3.0	白・白色系、黒斑	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	1.3kg。有。
17	M-2 36-28	2層目 内	直縁鉢	—	(11.0)	—	3.0	白・白色系、黒斑	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	1.3kg。有。
18	M-2 36-29	2層目 内	直縁鉢	—	(11.0)	—	3.0	白・白色系	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	1.3kg。有。
19	M-2 36-30	2層目 内	直縁鉢	—	(11.0)	—	3.0	白・白色系	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	1.3kg。有。
20	西端部F.A.T.	2層目 内	直縁鉢	—	(11.0)	—	3.0	白・白色系	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	1.3kg。有。
21	M-2 36-31	2層目 内	直縁鉢	—	(11.0)	—	3.0	白・白色系	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	1.3kg。有。
22	西端部F.A.T.	2層目 内	直縁鉢	—	(11.0)	—	3.0	白・白色系	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	1.3kg。有。
23	M-2 36-32	2層目 内	直縁鉢	—	(11.0)	—	3.0	白・白色系	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテ拉、底ハタケあり。	1.3kg。有。
24	西端部F.A.T.	2層目 内	直縁鉢	—	(11.0)	—	3.0	白・白色系	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテ拉、底ハタケあり。	1.3kg。有。
25	M-2 36-33	2層目 内	直縁鉢	—	(11.0)	—	3.0	白・白色系	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテ拉、底ハタケあり。	1.3kg。有。

M-4号古墳

No	出土位置	種別	器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	断面、成・形態、文様等の特徴	現状状況・備考	
1	M-4 36-1	2層目 内	直縁鉢	—	—	6.0	白色系	灰質	内: 黄褐色 外: 黄褐色	内: 黄褐色 外: 黄褐色	無。	
2	M-4 36-2	2層目 内	直縁鉢	—	—	6.0	白色系	灰質	内: 黄褐色 外: 黄褐色	内: 黄褐色 外: 黄褐色	口縁部小片。	
3	M-4 36-3	2層目 内	直縁鉢	—	(11.0)	36.7	14.2	白・白色系	灰質	内: 黄褐色 外: 黄褐色	内: 黄褐色 外: 黄褐色	1.12kg。
4	M-4 36-4 12-23-9 14-27-18 16-22-23 23-28-25 25-26-27	2層目 内	直縁鉢	(9.0)	—	5.0	白・白色系	灰質	内: 黄褐色 外: 黄褐色	内: 黄褐色 外: 黄褐色	口縁部小片。	
5	M-4 36-5 3-4-3-4-1 3-4-7-8-1 3-4-10-11-1 27-28-29	2層目 内	直縁鉢	—	—	6.0	白・白色系	灰質	内: 黄褐色 外: 黄褐色	内: 黄褐色 外: 黄褐色	口縁部-底部1.3kg。	
6	M-4 36-6	2層目 内	直縁鉢	—	—	6.0	白色系	灰質	内: 黄褐色 外: 黄褐色	内: 黄褐色 外: 黄褐色	口縁部小片。	

W-1号溝

No	出土位置	種別	器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	断面、成・形態、文様等の特徴	現状状況・備考
1	W-1-4	内筒破損	—	—	(12.1)	丸底	9.0	白色系	灰質	内: 黄褐色 外: 黄褐色	通孔径6cm。

D-4号土坑

No	出土位置	種別	器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	断面、成・形態、文様等の特徴	現状状況・備考
1	D-4 36-1	2層目 内	直縁鉢	—	—	(14.0)	4.0	白・白色系	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	1.3kg。有。
2	D-4 36-2	2層目 内	直縁鉢	—	—	(12.0)	—	白・白色系	灰質	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	1.3kg。有。

D-7号土坑

No	出土位置	種別	器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	断面、成・形態、文様等の特徴	現状状況・備考
1	D-7 36-1	2層目 内	直縁鉢	(9.1)	(4.1)	4.0	白・白色系	灰質	内: 黄褐色 外: 黄褐色	内: 黄褐色 外: 黄褐色	口縁部小片。

D-8号土坑

No	出土位置	種別	器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	断面、成・形態、文様等の特徴	現状状況・備考
1	D-8 36-2	2層目 内	直縁鉢	—	—	3.0	白・白色系、 2mm×2mm小窓	灰質	内: 黄褐色 外: 黄褐色	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	1.3kg。有。
2	D-8 36-3	2層目 内	直縁鉢	—	—	3.0	白色系	灰質	内: 黄褐色 外: 黄褐色	内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。 内: 黄褐色ヨコテラ、底ハタケあり。	1.3kg。有。

兩禪外

參考文獻

論文集

- | | | |
|-------------------|------|---|
| 石丸歎史 | 2012 | 「上野地域における古墳時代から中期への土器相続の展開」『信道』第59巻第5号・信濃史学会 |
| 小島敦子 | 2009 | 「第 10 章 暫調査の成績と課題 2. 古墳時代前期の土器編年」『群馬県立遺跡』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 小島敦子 | 2009 | 「群馬県立遺跡の再検討(1) - 群馬県土器を中心として-」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号・群馬県立歴史博物館 |
| 坂口一 | 1986 | 「古墳時代後期の土器編年」『群馬文化』208 群馬県地域研究協議会 |
| 坂口一 | 1999 | 「群馬県における古墳時代中期の土器の様相」・「荒巻北二木堂遺跡の出土土器を中心として-」『東国土器研究』第5号・東国土器研究会 |
| 坂口一 | 2000 | 「北関東東西に亘る S 字形標的の波足と定位」『S字型を考える』 東海考古学フォーラム |
| 深沢新 | 2008 | 「第9章 考察 1 太田地域における古墳時代前期の土器編年」『成塙向山古墳群』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 前橋市文化振興委員会 | 1971 | 「前橋市立史」通史編1原始古代中世 |
| 発掘調査報告書等 | | |
| 群馬県教育委員会 | 1990 | 「群馬県の中世鉄道」 |
| 群馬県教育委員会 | 2017 | 「群馬古墳遺跡」 |
| 財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 2001 | 「西青尺司道路」 |
| 財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 2001 | 「他丸仲田道路」 |
| 財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 2002 | 「鳴光路櫻橋道路」 |
| 財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 2002 | 「中村村前道路(1)～(4)区」 |
| 財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 2003 | 「他丸仲田道路(2)」 |
| 財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 2004 | 「前田道路」 |
| 財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 2005 | 「徳丸高塚道路」 |
| 前橋市教育委員会 | 1996 | 「乙姫山古墳」 |
| 前橋市教育委員会 | 2009 | 「年報 第41集 平成22年度文化財調査報告書」 |
| 前橋市教育委員会 | 2014 | 「南部拠点地区土器群 No.1」 |
| 前橋市教育委員会 | 2015 | 「朝倉・後園水田道路」 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 1997 | 「乙供下堂木Ⅱ道路」 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 1998 | 「山王若宮道路」 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 1998 | 「六供中京安寺道路・六供下堂木Ⅲ道路」 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 1999 | 「山王若宮Ⅱ道路」 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 2001 | 「山王若宮Ⅲ道路」 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 2002 | 「山王若宮道路」 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 2006 | 「庄藏木ノ宮道路」 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 2006 | 「六供道路群」 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 2009 | 「乙供道路群 No.5」 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 2010 | 「房太板古道路」 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 2010 | 「六供道路群 No.6」 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 2013 | 「乙供道路群 No.7」 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 2014 | 「乙供道路群 No.8」 |

VI 発掘調査の成果と課題

山王若宮V遺跡が位置する前橋台地東部崖際の微高地は、4世紀から7世紀にかけて多くの古墳が築造された場所である。しかし、後世の開発などによる削平で数多くの古墳が未調査のまま消失してしまっている。そのような中で、当遺跡周辺は先に4度に亘って発掘調査が行なわれ、多くの成果を上げている。『上毛古墳総覧』において未確認であった古墳が10基、墳丘や周堀はすでに消失しているが小石郭が1基検出している。古墳は円墳が7基、帆立貝形古墳が1基、形態不明が2基である。その他、住居跡が24軒、掘立建物跡、竪穴状遺構、井戸跡など古墳時代を中心とした遺構が確認されている。当遺跡は山王小学校のプール改築にともなう発掘調査であり、限られた調査範囲ではあったが、過去4度の調査と同様に古墳3基、周溝墓1基、住居跡4軒など古墳時代の遺構が検出されている。また、先述しているが前橋台地東部では縄文時代の遺跡が非常に少なく、遺物は少量出土しているが遺構はごくわずかしか検出されていない。しかし、今回1軒ではあるが縄文時代の住居跡も検出されている。このような縄文時代の住居も含め、記録として残っていない古墳を検出できたことは当地域の貴重な資料となると考える。本章では山王若宮遺跡（以下、山王若宮I遺跡とする）～山王若宮IV遺跡までの成果を踏まえて、改めて発掘調査の成果を中心に周辺の遺跡分布や古墳の動向を考察していく。

1 調査の成果

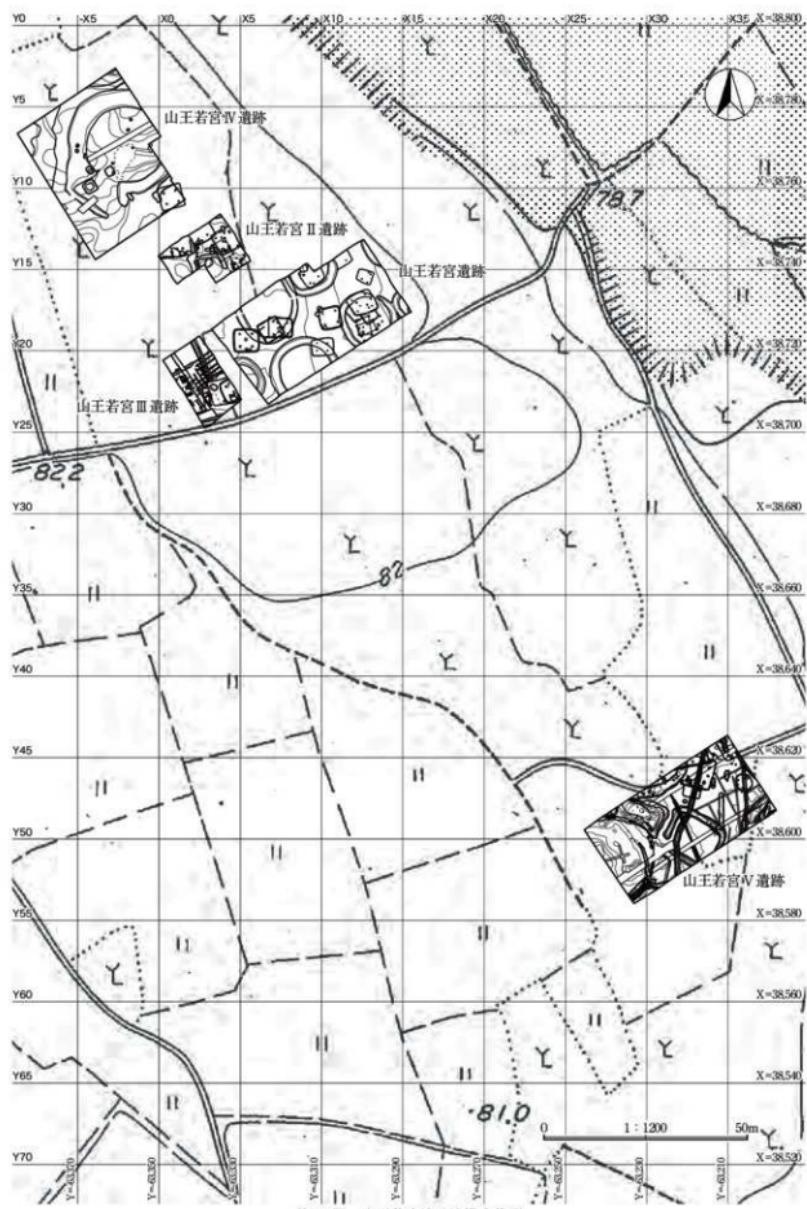
山王若宮V遺跡は縄文時代から古墳時代にかけての遺跡である。縄文時代は土坑2基、中期の住居跡1軒が検出されている。弥生時代は遺構の検出はないが、遺物が少量確認されている。古墳時代の遺構は4世紀から7世紀にかけて遺構が確認されており、4世紀の周溝墓1基、4～6世紀の古墳3基、4世紀の住居が4軒、6～7世紀の溝が1条検出されている。

周辺地域からの縄文時代の遺構検出例がほとんどなく、居住活動をほぼ営んでいなかったのではないかと推測されていたが、今回勝坂3式土器を主体とする住居が検出されたことにより、前橋台地東部でも縄文時代中期に居住活動が営まれていたことが分かった。1軒のみの検出であるため集落として機能するほどの営みがあったかは判断できないが、西善尺司遺跡の石器製作址と合わせて今後の成果に期待したい。

古墳時代の遺構として、検出された周溝墓を含む古墳4基は、主体部、埴丘部がいずれも後世の開発等で削平され、また、調査範囲が限られていることもあり周堀の一部のみの確認にとどまっている。M-1号周溝墓は周堀底面から石田川式土器の口縁が出土しており築造時期は古墳時代前期中葉と推定される周溝墓である。M-2号墳は覆土中にHr-FA洪水砂が堆積しており、出土遺物からも5世紀末と推定される。

2 山王若宮地域の古墳群の変遷

以前調査されている山王若宮I遺跡～山王若宮IV遺跡の古墳を含めて、山王若宮の古墳群の概要をまとめてみる。山王若宮I遺跡ではM-1～7号墳が検出されている。古墳の規模と形状は、M-1・2号墳は推定径15～17m、M-3～7号墳は推定径9～13mとすべて少規模の円墳である。築造時期については、M-4・6号墳はわずかに出土した埴輪から6世紀末～7世紀にかけてと推定される。M-1～3・5・7号墳は出土遺物がなく埴輪を伴わない古墳と考えられ、終末期7世紀代の古墳と推定される。埴丘部・主体部は後世削平されており、周堀のみの検出である。山王若宮II遺跡では、検出の範囲が狭く出土遺物がほぼない状況で時期を推定することは難しいが、古墳と思われる小石郭と周堀の一部（M-1号墳）が検出されている。小石郭は長径1.64m、短径0.79mを測り、人体をぎりぎり包めるほどの規模である。天井石などは確認されていないが、壁の高さは0.35m内外ほどになるのではないかとみられる。M-1号墳は遺構の大半が調査範囲外であり規模や時期は不明であるが、埴輪が数点出土しているため古墳の周堀と推定されている。山王若宮IV遺跡ではM-1・2号墳が検



第24図 山王若宮遺跡構全体図

出されている。古墳の規模と形状は、M-1号墳は全長約25mの帆立貝形古墳である。M-2号墳は調査区域北東隅にて周堀の一部のみの確認であり、古墳の規模・形状について不明ではあるが、覆土の堆積状況がM-1号墳と同様であるため古墳と推定している。築造時期については、M-1号墳は円筒埴輪や形象埴輪が出土しており、6世紀前半から中葉と推定される。山王若宮I遺跡から当遺跡検出の古墳は4世紀代に周溝墓1基と古墳1基、5世紀末から6世紀初2基、6世紀後半2基、7世紀5基となっている。4世紀前半から古墳の築造が始まり、7世紀にその最盛期となっている。

では、当遺跡を含む朝倉・広瀬古墳群の様相はどうであろうか。4世紀前半、八幡山古墳、前橋天神山古墳の築造が開始される。前橋天神山古墳に先行して前方後方墳の八幡山古墳が築造されたと推定される。続いて4世紀後半、朝倉II号墳、文殊山古墳などが築造されたと考えられている。5世紀に入ると確認できる古墳は激減する。5世紀末から6世紀初頭にかけて帆立貝形古墳の亀塚山古墳が築造され、6世紀には築造数が増え始め6世紀後半から7世紀にかけて最盛期となる。『上毛古墳総覧』に掲載されている古墳は多くが未調査のまま削平されているため正確な年代比定は難しいが、形態や規模などから古墳群の最盛期は古墳時代後期と推定される。

上記の結果から、山王若宮地域と広瀬・朝倉古墳群の時期的変遷については大きな差異はない。そして分布範囲の変遷としては、古墳時代前期、八幡山古墳・前橋天神山古墳を中心とする地域に点在していたが、古墳の造営数が激減する古墳時代中期になるとその分布範囲は南北へと広がる。古墳時代後期には小円墳を主とした群集墳としてさらに墓域を拡大する。山王若宮の地域は古墳時代後期と推定される古墳が多く群集墳を形成していたと考えられる。また、山王若宮IV遺跡M-1号墳は6世紀前半から中葉の帆立貝形古墳であり、周辺の小円墳の盟主墳であったのではないかと推測される。

3 山王若宮の集落と土器の変遷

田口一郎氏によると、山王地域は群馬における古墳出現期の中核であり、初期のS字口縁台付き壺が波及していく段階において、山王若宮遺跡では注目すべき遺跡であるとしている。山王地域周辺の調査事例が少なく、土器の様相は不明瞭であるが、S字壺の波及期には当該地域では外来系土器群が在来系土器群を上回っていたと推測されている。（田口2000）今回の調査では4世紀代と推定される住居跡が2軒、5世紀後半と推定される住居跡が1軒、5世紀末と推定される住居跡が1軒検出されている。過去に調査された4遺跡では、時期不明な住居4軒を除き4世紀前半が1軒、4世紀半ば1軒、4世紀後半8軒、4世紀末が4軒、計14軒検出されている。また当遺跡のH-2号住居、山王若宮I遺跡H-13号住居、山王若宮II遺跡H-1・2号住居、山王若宮III遺跡H-2号住居からS字壺が出土している。

田口氏の行った分類と編年を参考に、山王若宮遺跡におけるS字壺の変遷の概要をまとめてみる。分類としては初期のS字壺は口縁部刺突文があることが指標とする。つぎにその口縁部刺突文が喪失し内面頭部に横位ハケメ調整を施すものとなる。内面頭部の横位ハケメ調整が喪失し外側肩部横位ハケメ調整と胴部ハケメ以前のヘラケズリのものへと変化し、外側肩部横位ハケメ調整が喪失し胴部ハケメ以前のヘラケズリを指標とするものとなる。最後に外側胴部ハケメ調整の喪失を指標とする。また、口縁部の傾きは古い時期ほど大きく外傾する傾向にあり、胴部の形態も肩部に最大径があった球体から徐々に最大径の位置が胴部中央へと移動しその後は胴部が長胴化していくとの変化が見受けられる。

山王若宮地域におけるS字壺の初現にあると考えられるのは、山王若宮II遺跡H-1出土S字壺であろう。口縁部に刺突文があるS字壺であり、田口分類I類I期にあたり4世紀初頭と推定される。また共伴遺物として伊勢湾系土器であるバレス壺の胴部破片も出土している。外来系土器と共伴していることから、S字壺が波及する初期の段階であると考えられる。山王若宮I遺跡H-13出土S字壺は、口縁部の刺突文は無くなり内面頭部に横位ハケメ調整が施されている。田口分類II類II期にあたり4世紀前半と推定される。これと同時期

と考えられるのが今回の調査で出土したH-2出土S字甕である。また遺構外ではあるが、H-2出土と同形態のS字甕も出土している。当地域では周辺も含めて4世紀以前の住居跡はほぼ確認されていないことから、4世紀に入り石田川式土器を持った集団がこの地域で居住活動を開始したと考えられているのである。

また山王若宮地域では4世紀代初頭には集落が形成されていたが5世紀前半には集落が姿を消し、5世紀末に再び集落が営まれるようになるようである。検出された住居跡は5世紀前半が1軒、5世紀末が4軒となっている。では、周辺地域はどのように集落が変遷したのであろうか。4世紀半ばの住居は山王若宮地域から北西にいった六供東京安寺遺跡で2軒、六供中京安寺遺跡で1軒、六供 No.5 遺跡で1軒、六供下堂木II遺跡で1軒、そして朝倉・広瀬古墳群に近接する後閑团地遺跡で3軒の計8軒、4世紀後半～末の住居は六供東京安寺遺跡で8軒、六供中京安寺遺跡で1軒、六供 No.5 遺跡で1軒、六供下堂木II遺跡で1軒の計11軒と4世紀代の住居は19軒検出されている。5世紀代後半の住居は六供 No.5 遺跡で1軒、六供 No.6 遺跡で16軒、六供 No.7 遺跡で6軒の計23軒検出されている。この住居軒数の時期的な推移は、朝倉・広瀬古墳群の変遷と同様な推移と考えられる。

以上から考察できることは、朝倉・広瀬古墳群を中心とする当該地域では、4世紀前半、前橋天神山古墳、八幡山古墳などが築造された頃、当遺跡周辺には少数の住居が存在し、前橋台地東端の微高地を墓域とし石田川式土器を持つ集団が六供遺跡群周辺と山王若宮地域周辺に点在していた。しかし、5世紀代に入り集落がほぼ姿を消したため古墳築造の空白期となったと考えられる。5世紀後半、再び六供遺跡群周辺と山王若宮遺跡群周辺に集落が営まれ始め、併行して当遺跡M-2号墳、亀塚山古墳、上陽17号墳などが造営される。6世紀代は六供遺跡群周辺地域でさらに居住活動が盛んになり、それに伴って山王若宮周辺地域を中心に古墳の築造が盛んに行なわれていったと考えられるのではないだろうか。

上齋村 1号古墳
山鹿家一子山古墳

上齋村 2号古墳

才トガ命山古墳

赤木家山古墳

上齋村 21号古墳
上齋村 22号古墳

上齋村 23号古墳

上齋村 24号古墳

龜家山古墳

上齋村 25号古墳

上齋村 26号古墳

大原山古墳

山鹿古墳

金城坂古墳

上齋村 1号古墳

上齋村 10号古墳

上齋村 11号古墳

上齋村 12号古墳

上齋村 13号古墳

上齋村 14号古墳

上齋村 15号古墳

上齋村 16号古墳

上齋村 17号古墳

上齋村 18号古墳

上齋村 19号古墳

上齋村 20号古墳

上齋村 21号古墳

上齋村 22号古墳

上齋村 23号古墳

上齋村 24号古墳

上齋村 25号古墳

上齋村 26号古墳

上齋村 27号古墳

上齋村 28号古墳

上齋村 29号古墳

上齋村 30号古墳

上齋村 31号古墳

上齋村 32号古墳

上齋村 33号古墳

上齋村 34号古墳

上齋村 35号古墳

上齋村 36号古墳

上齋村 37号古墳

上齋村 38号古墳

上齋村 39号古墳

上齋村 40号古墳

上齋村 41号古墳

上齋村 42号古墳

上齋村 43号古墳

上齋村 44号古墳

上齋村 45号古墳

上齋村 46号古墳

上齋村 47号古墳

上齋村 48号古墳

上齋村 49号古墳

上齋村 50号古墳

上齋村 51号古墳

上齋村 52号古墳

上齋村 53号古墳

上齋村 54号古墳

上齋村 55号古墳

上齋村 56号古墳

上齋村 57号古墳

上齋村 58号古墳

上齋村 59号古墳

上齋村 60号古墳

上齋村 61号古墳

上齋村 62号古墳

上齋村 63号古墳

上齋村 64号古墳

上齋村 65号古墳

上齋村 66号古墳

上齋村 67号古墳

上齋村 68号古墳

上齋村 69号古墳

上齋村 70号古墳

上齋村 71号古墳

上齋村 72号古墳

上齋村 73号古墳

上齋村 74号古墳

上齋村 75号古墳

上齋村 76号古墳

上齋村 77号古墳

上齋村 78号古墳

上齋村 79号古墳

上齋村 80号古墳

上齋村 81号古墳

上齋村 82号古墳

上齋村 83号古墳

上齋村 84号古墳

上齋村 85号古墳

上齋村 86号古墳

上齋村 87号古墳

上齋村 88号古墳

上齋村 89号古墳

上齋村 90号古墳

上齋村 91号古墳

上齋村 92号古墳

上齋村 93号古墳

上齋村 94号古墳

上齋村 95号古墳

上齋村 96号古墳

上齋村 97号古墳

上齋村 98号古墳

上齋村 99号古墳

上齋村 100号古墳

上齋村 101号古墳

上齋村 102号古墳

上齋村 103号古墳

上齋村 104号古墳

上齋村 105号古墳

上齋村 106号古墳

上齋村 107号古墳

上齋村 108号古墳

上齋村 109号古墳

上齋村 110号古墳

上齋村 111号古墳

上齋村 112号古墳

上齋村 113号古墳

上齋村 114号古墳

上齋村 115号古墳

上齋村 116号古墳

上齋村 117号古墳

上齋村 118号古墳

上齋村 119号古墳

上齋村 120号古墳

上齋村 121号古墳

上齋村 122号古墳

上齋村 123号古墳

上齋村 124号古墳

上齋村 125号古墳
山王若御道跡第一号墳
(山王竹原古墳)

廣瀬川低地帶

写真図版



遺跡の位置（上が北、2010年撮影）



調査区遠景（中央奥に文殊山・阿弥陀山古墳 南東から）



調査区遠景（段崖下は広瀬川低地帯 西から）



調査区全景（上が西）



調査区全景（西から）



調査区全景（北西から）



調査区全景（北東から）



調査区全景（北から）



J-1 全景（東から）



J-1 遺物出土状況（北から）



J-1 遺物出土状況（東から）



作業風景（北から）



H-1 + 2 全景（北から）



H-1 + 2 全景（南から）



H-1 + 2 A - A'（南から）



H-1 + 2 B - B'（西から）



H-1 炉全景（西から）



H-1 貯藏穴E - E'（東から）



H-2 炉C - C'（西から）



作業風景（北西から）



H-3・4 全景（北から）



H-3・4 全景（東から）



H-3・4 断面（東から）



H-3・4 断面（南西から）



H-3・4 遺物出土状況（北東から）



H-3 遺物出土状況（東から）



H-4 F-F'（東から）



説明会風景（北西から）



作業風景（東から）



作業風景（南から）



作業風景（南から）



作業風景（東から）



M-1 全景（上が西）



M-1 全景（北から）



M-1 遺物出土状況（南東から）



M-1 遺物出土状況（北から）



M-1 遺物出土状況（東から）



M-1 南壁（北から）



M-1 A-A' 西側（南から）



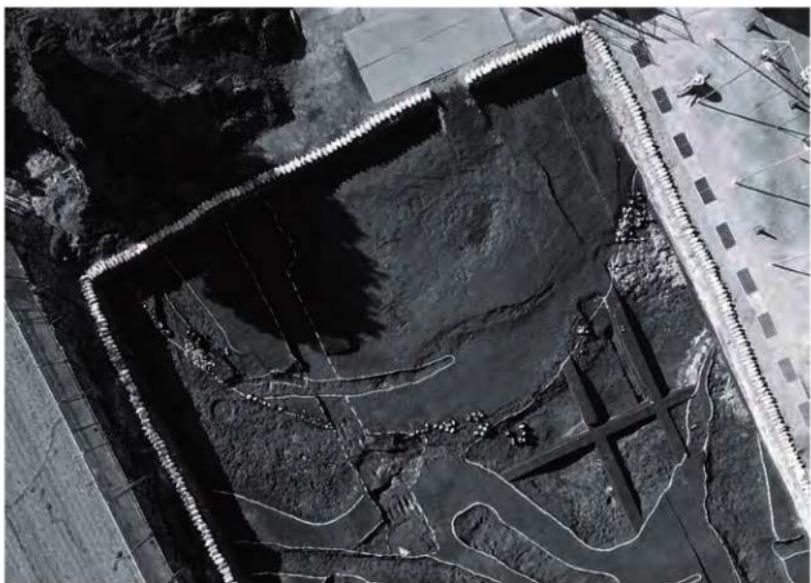
M-1 A-A' 東側（南から）



M-1 南壁（北から）



M-1 南壁（北から）



M-2 全景（上が西）



M-2 全景（東から）



M-2 全景（東から）



M-2 箕石検出状況（東から）



M-2 周囲北側全景（南東から）



M-2 周囲北側FA洪水壁検出状況（東から）



M-2周堀北側FA洪水層検出状況（南東から）



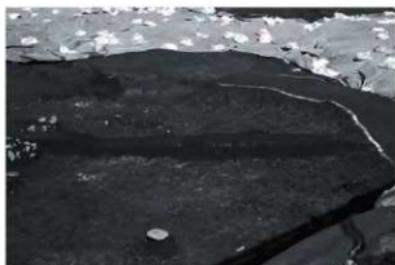
M-2 C-C' (南から)



M-2 D-D' (南から)



M-2 E-E' (西から)



M-2 B-B' (南から)



M-2 小型壺出土状況（北西から）



M-2 A-A' (西から)



M-2 G-G' 南側（東から）



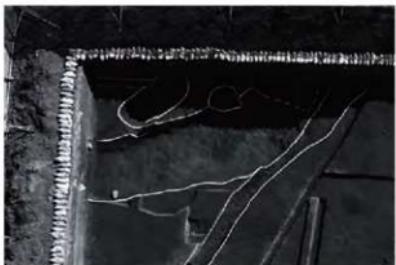
M-3 全景（上が南）



M-3 全景（東から）



M-3 A-A' (西から)



M-4 全景（上が南）



M-4 全景（北から）



M-4 全景（北東から）



M-4 南壁（北から）



M-4 東壁周囲部（西から）



W-1 全景（南から）



W-1 全景（北から）



W-1 A-A' (南から)



W-1 C-C' (北から)



W-1 埋輪出土状況（北から）



W-2・3 全景（南西から）



W - 2 + 3 A - A' (北から)



W - 4 A - A' (南から)



W - 5 全景 (北西から)



W - 5 A - A' (西から)



W - 6 全景 (南から)



W - 6 + 8 + 10 全景 (東から)



W - 6 + 8 南壁 (北から)



W - 6 + 8 + D - 2 A - A' (南から)



W-6 B-B' (南から)



W-7 全景 (南から)



W-7 A-A' (北から)



W-9 全景 (西から)



W-9 A-A' (西から)



W-10 全景 (東から)



W-11 全景 (北から)



W-11 全景 (南から)



W-11A - A' (南から)



W-12全景 (南から)



W-12B - B' (南から)



W-12C - C' (南から)



M-4、W-12A - A' (東から)



W-13全景 (北から)



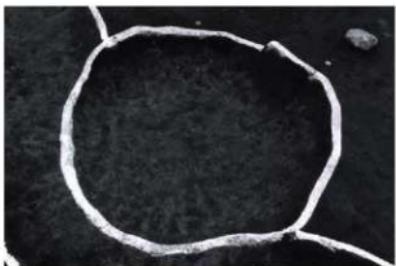
W-14全景 (北から)



W-15全景 (南から)



D-1 A-A' (南から)



D-2 全景 (南から)



D-3 全景 (西から)



D-3 A-A' (南から)



D-4 全景 (北西から)



D-5 全景 (北から)



D-5 A-A' (西から)



D-6 全景 (西から)



D-6 A-A' (南から)



D-7 全景 (北から)



D-8 全景 (北西から)



D-9 全景 (西から)



P-1 全景 (東から)



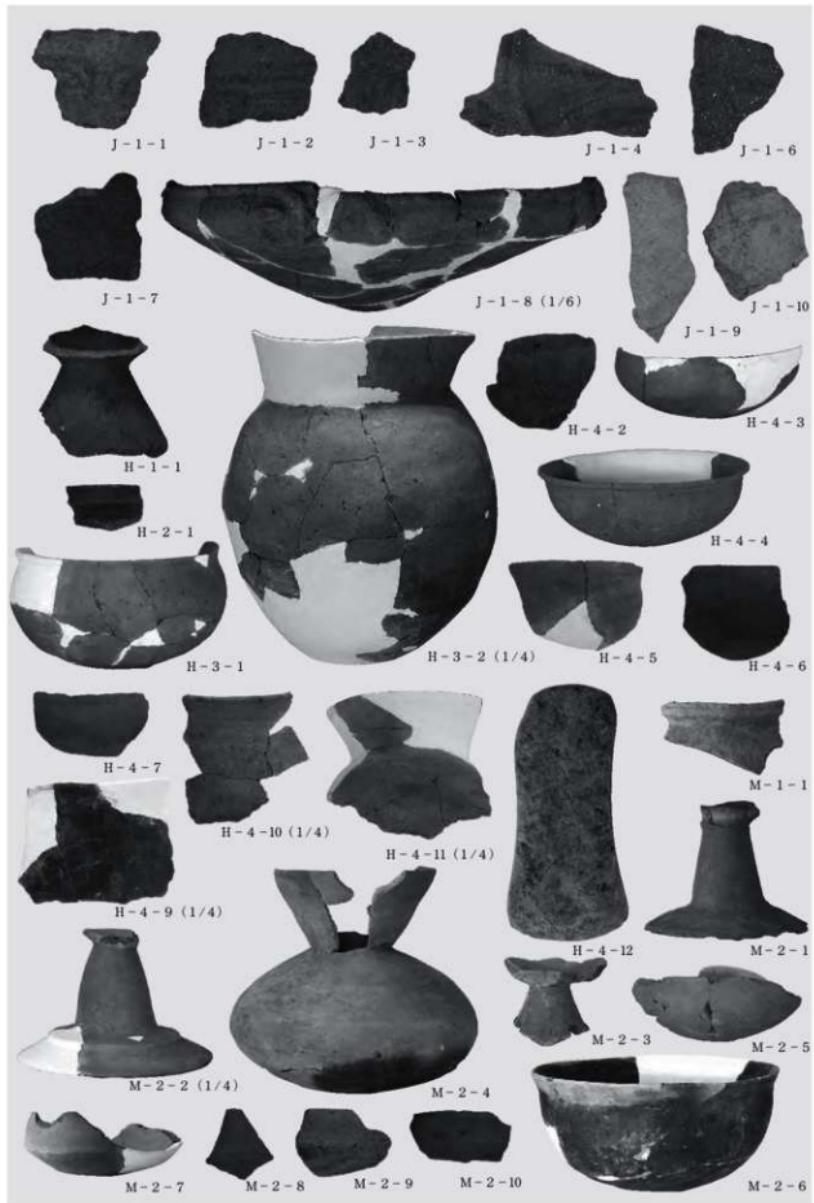
P-3 全景 (南から)

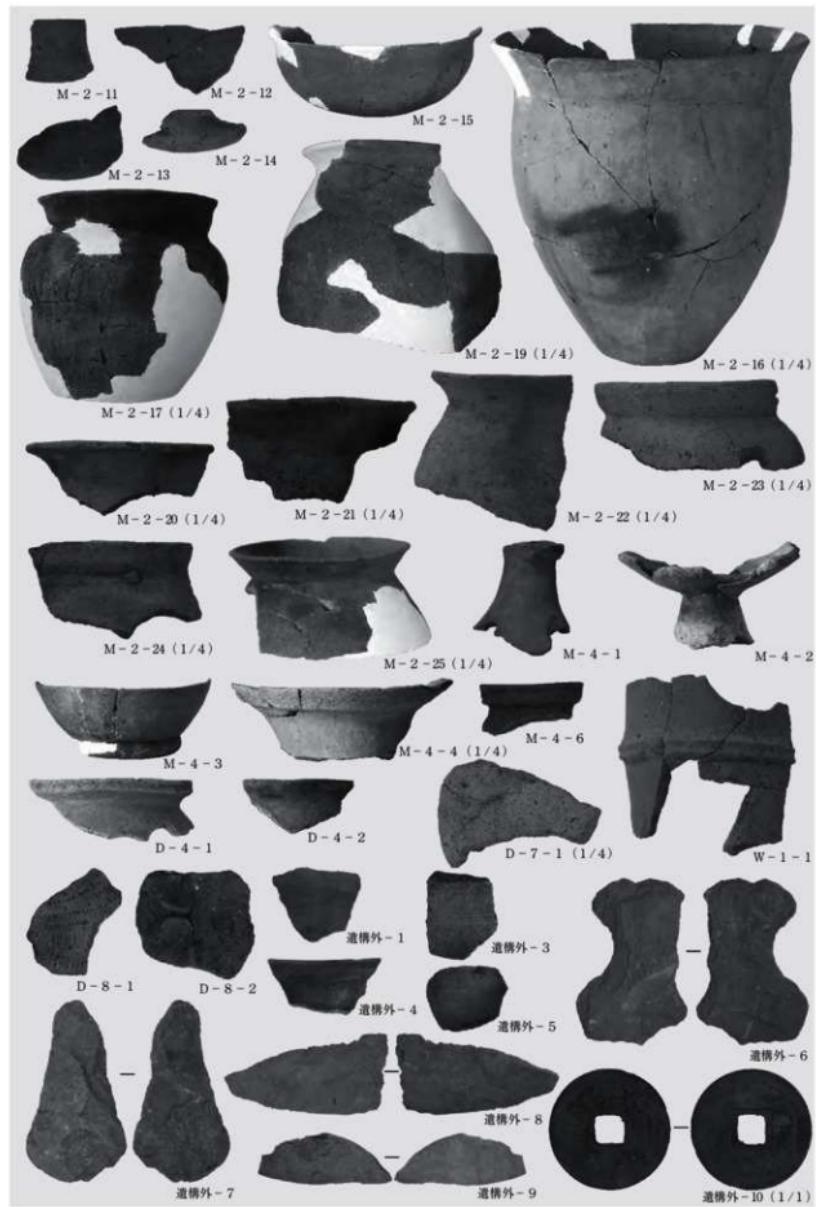


P-4 全景 (西から)



基本土層 (西から)





報告書抄録

カタカナ	サンノウカミヤゴイセキ
書名	山王若宮V遺跡
副書名	山王小学校プール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	-
シリーズ名	-
シリーズ番号	-
編著者名	小峰 篤・土屋一未
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町1丁目15番地3
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市総社町3丁目11番地4
発行年月日	2018年3月23日

フリガナ	フリガナ	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因	
		所在地	市町村	遺跡番号	北緯				
サンノウカミヤゴイセキ	サンノウカミヤゴイセキ	前橋市山王町172、 176-1、176-6	10201	29G72	36°20'45"	139°7'43"	2017.11.09 2017.12.25	1,147m ²	山王小学校プール改築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
サンノウカミヤゴイセキ	集落・ 墳墓	縄文時代 古墳時代 中・近世	住居跡 周溝墓 帆立貝形古墳 円墳 溝 土坑 ビット	5軒 1基 1基 15基 9基 4基	縄文土器 石器 S字状口縁台付甕 土師器・須恵器 北宋銭(宋通元寶)		縄文時代中期の住居跡 古墳時代前期から中期にかけての集落、墳墓群。		

山王若宮V遺跡

山王小学校プール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018年3月16日 印刷

2018年3月23日 発行

発行

前橋市教育委員会文化財保護課

〒371-0853 群馬県前橋市総社町3丁目11番地4

TEL 027-280-6511

編集
印刷

技研コンサル株式会社

朝日印刷工業株式会社

